

第4節 弥生時代の調査成果

1 概要(第40図)

弥生時代の遺構は当遺跡では顕著ではなく、3区・4区でわずかに竪穴住居跡2棟(SI1・2)、掘立柱建物跡6棟(SB3・6・10・12・13・18)、貯蔵穴と考えられる土坑3基(SK12・51・57)、その他土坑3基(SK47・48・49)を検出したに過ぎない。

このうち、SI1は焼失住居であった。また、SI2は直径7.8mを測る当該地域でも大型の竪穴住居跡で周囲に掘立柱建物跡や貯蔵穴が存在しており、有力層の住居である可能性がある。

検出した遺構はいずれも調査区南側にあり、集落の本体は南側の調査区外に存在しているものと推定される。

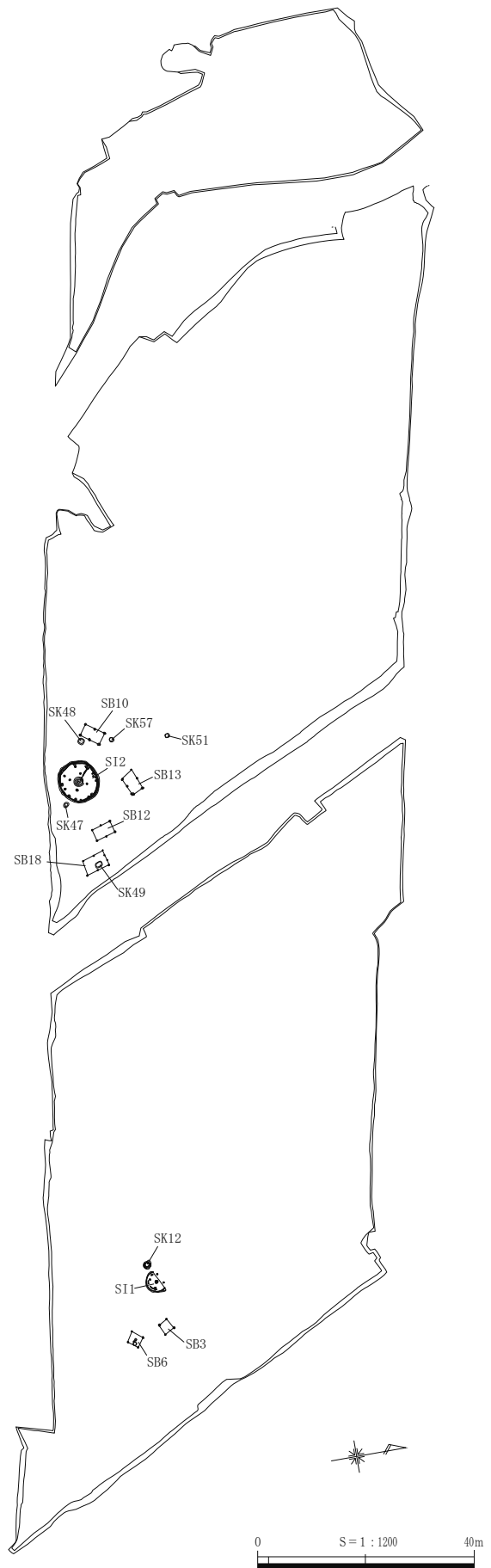
2 竪穴住居跡

SI1(第41・42図、表2、PL.10・35)

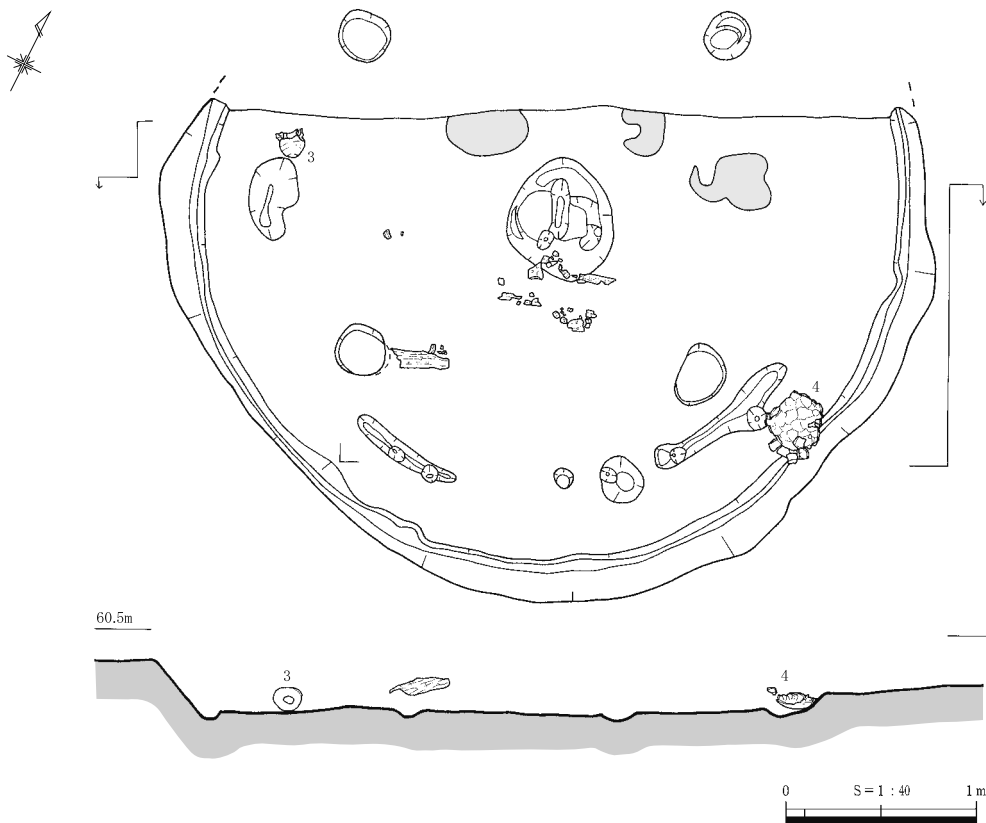
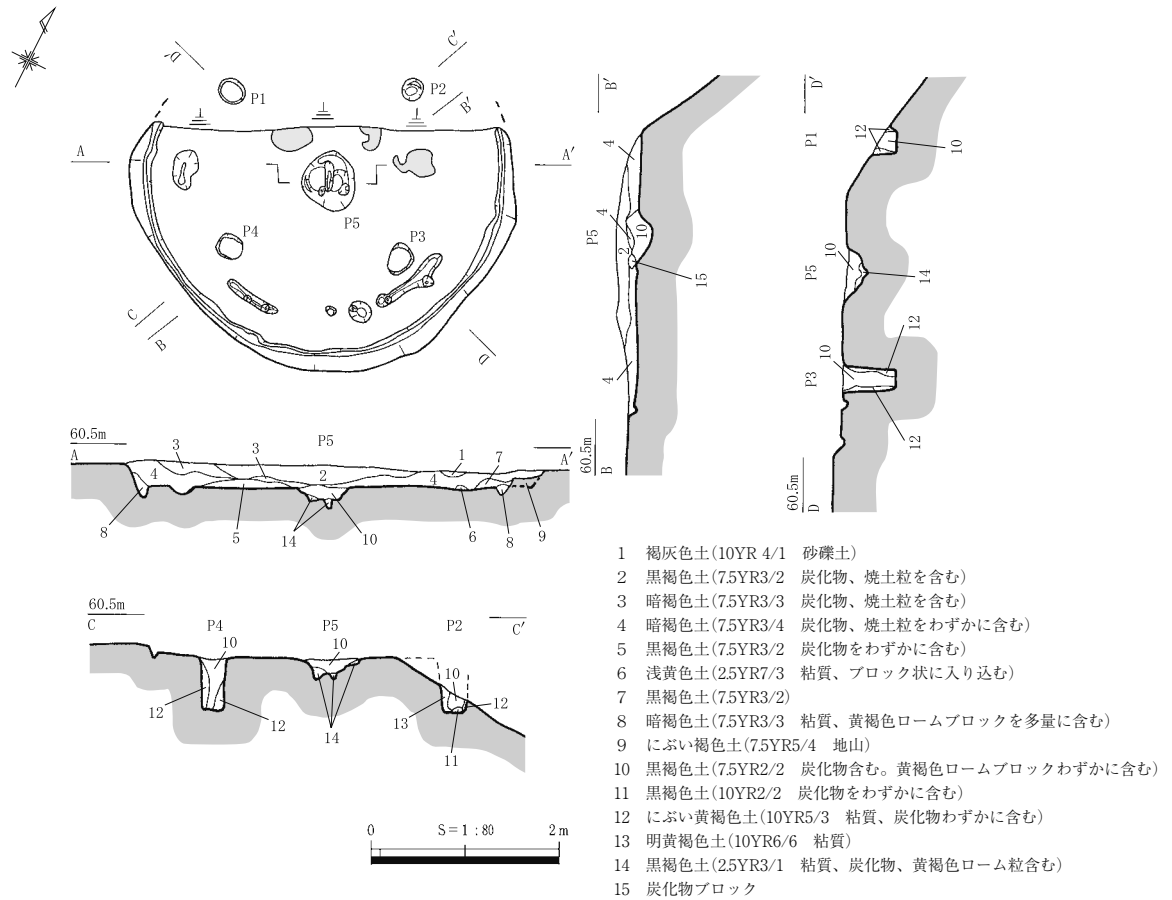
4区南東側のE9グリッドにあり、標高60.2mの平坦面に位置する。住居の北側約4分の1は圃場整備の際に大きく掘削されており、約50cmの段差となっている。

当遺構の平面形は、円形に復元することができる。規模は、検出面で長軸4.1m、短軸2.6m以上を測る。壁高は最大25cmで、床面積は6.5㎡以上、推定で約10㎡を測る。壁際には、幅5～10cmの壁溝があり全周するものと考えられる。床面上では、壁溝の内側に途切れ途切れに溝が検出されており、建て替え前の壁溝と判断できる。主柱穴は4本で、径30cm前後、深さ50cm前後を測る。P3、P4では柱痕が認められ、柱径を復元すると約20cmである。P1、P2は掘削法面で検出した。主柱穴間距離は、P1-P2間から順に1.9m、1.8m、1.8m、1.75mである。住居中央には主柱穴より浅く大きい断面形が二段掘りとなる、中央ピットP5がある。埋土の色調及び炭化物を含む点で、住居埋土下層に近似することから、P5は、住居廃絶時には開放されていた可能性がある。

埋土は6層に分けられる。主に黒褐色から褐色土で、全層で炭化物、焼土を含んでいる。中央ピット



第40図 弥生時代遺構分布図



第41図 SI 1

周辺で、床面からやや浮いた状態で垂木と考えられる炭化材が認められたことから、焼失住居の可能性が考えられる。樹種同定の結果、No.208はクリ、No.211はクスノキと同定された(第4章参照)。

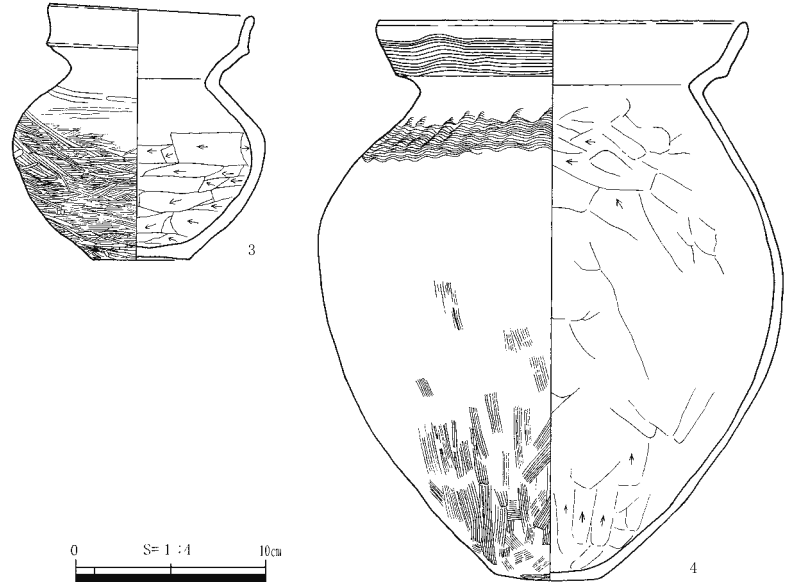
中央ピット周辺に30～40cmの範囲で焼土面が3箇所認められた。よく焼け締まっていることから、焼失の際に形成されたものではなく、地床炉として機能していた可能性がある。

出土遺物は、住居西側床面上で弥生土器小型甕3、東側壁際床面上で弥生土器甕4が出土した。4はつぶれたような状態で、3はほぼ完形での出土である。

時期は出土遺物から、弥生V-3様式、弥生時代後期後葉ごろと考える。なお、炭化材のAMS年代測定を行った結果、 $1940 \pm 21\text{yrBP}$ ～ $1945 \pm 20\text{yrBP}$ となり、紀元1世紀から2世紀前葉の値が示された(第4章参照)。

表2 SI1ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P1	27×27-26	主柱穴
P2	25×23-28	主柱穴
P3	32×25-53	主柱穴、柱痕径20cm
P4	28×27-55	主柱穴、柱痕径20cm
P5	65×57-24	中央ピット



第42図 SI1出土遺物

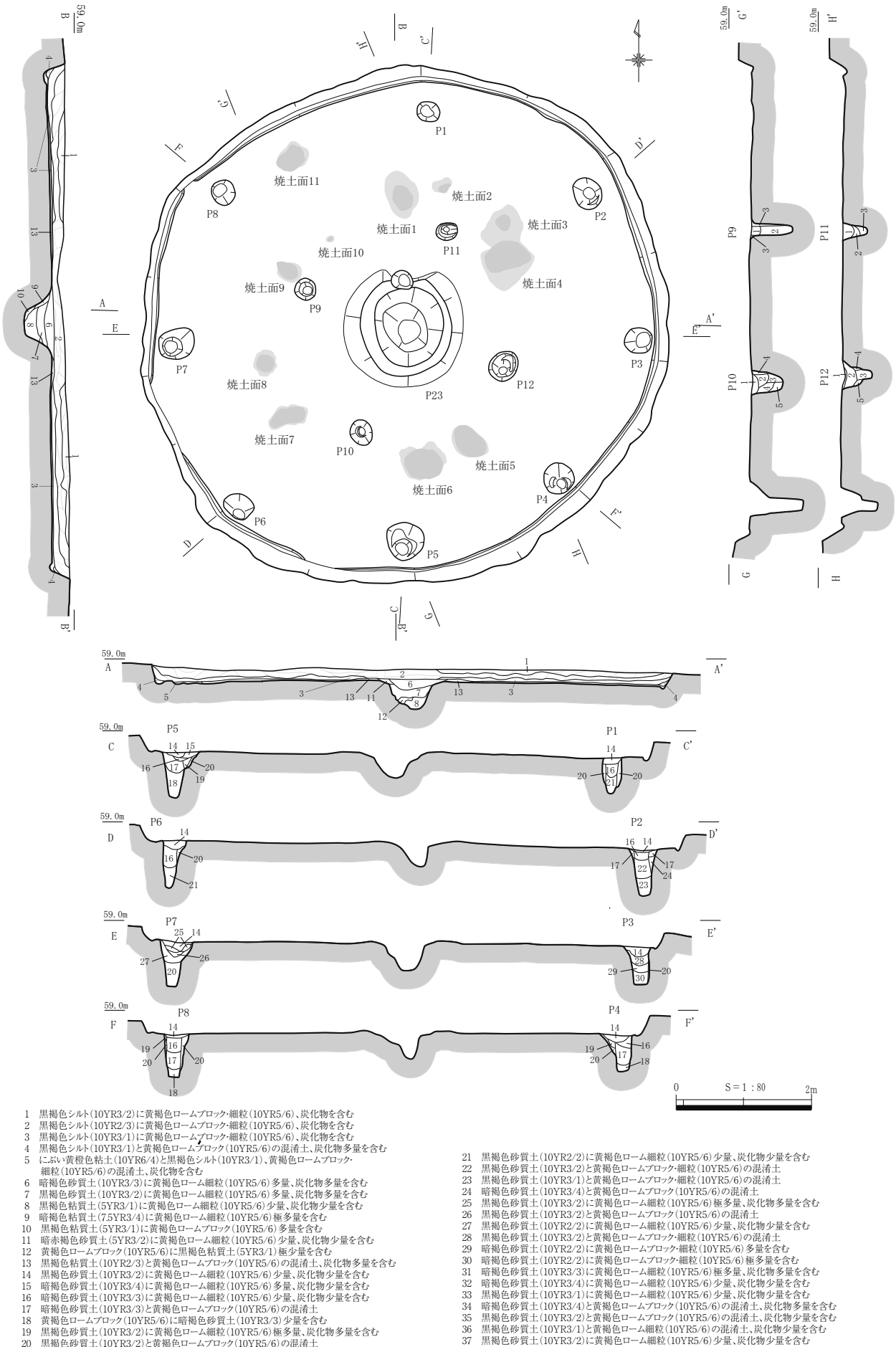
SI2(第43～45図、表3、PL.11・35～37)

3区南東側N8・N9・O8・O9グリッドにあり、標高58.7～58.9mの平坦面に立地する。遺構検出面はクロボク漸移層とソフトロームの境界付近にあたり、本来存在していた住居上半は圃場整備による削平のため遺存していない。

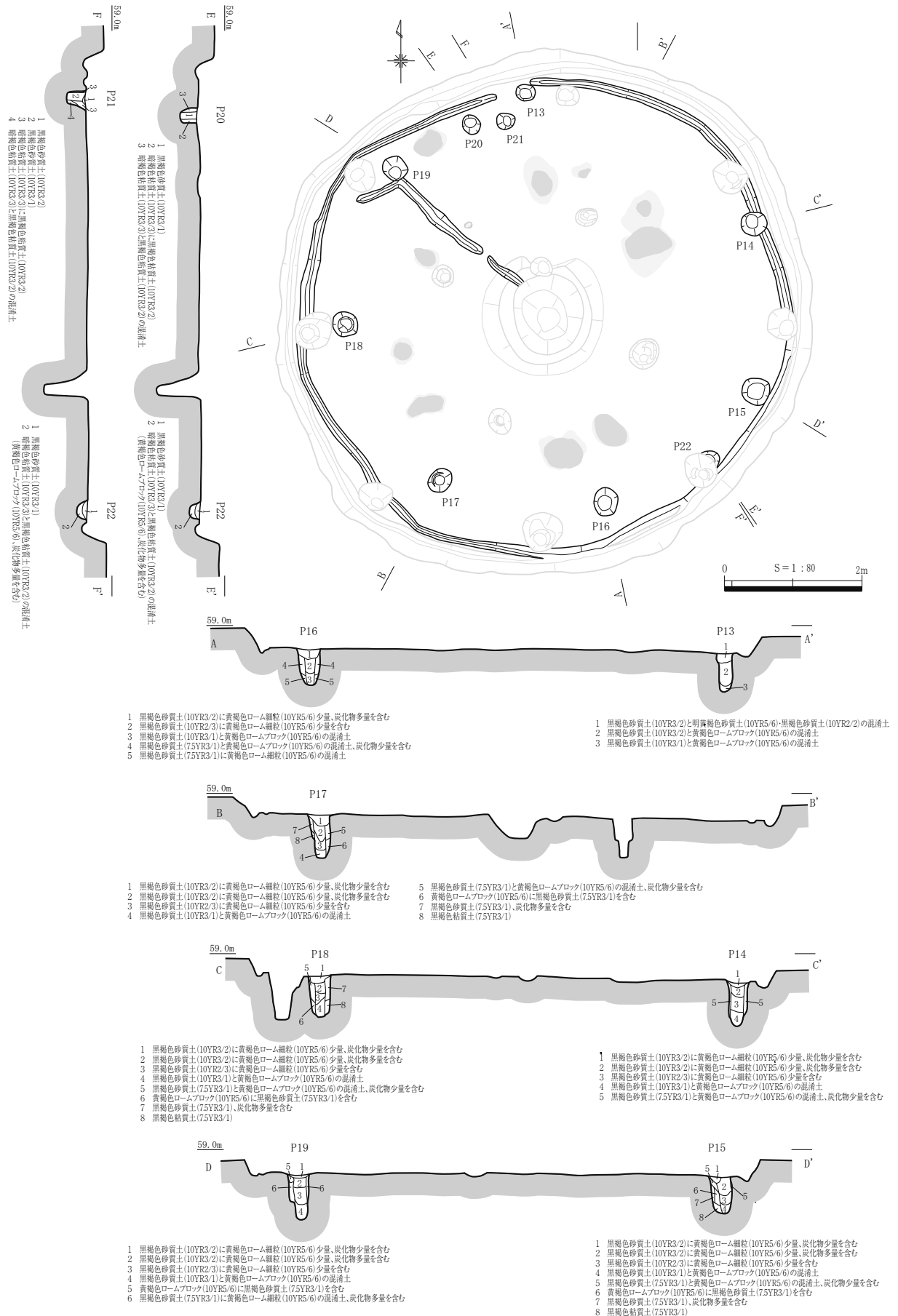
SI2は八角形を呈する竪穴住居跡で、1回の建て替えが認められた。建て替え後の住居規模は検出面で長軸7.8m、短軸7.4m、壁高は0.2～0.3mを測り、床面積は40.1㎡である。建て替え前の床面積は35.8㎡である。

建て替え後の床面には、全面に厚さ3cmほどの貼床が施され、住居中央には周堤をともなう中央ピットP23が設けられる。柱穴はP1～12で、周壁沿いに配列されるP1～P8の8本が主柱穴、中央ピットの周囲に配列されるP9～P12の4本も主柱穴と同様の規模を持ち、主要な構造柱と考えられる。主柱穴間距離は、P1-P2間から順に2.6m、2.3m、2.5m、2.5m、2.5m、2.7m、2.4m、3.3mである。外側の主柱穴と内側の構造柱の間の床面には、計11箇所の焼土面が形成されており、おそらく2箇所1対を基調としているように窺われる。どれもよく焼け締まっており、地床炉として機能した可能性がある。

建て替え前の柱穴はP13～22で、主柱穴は床面の周縁に7本(P13～19)、補助的な柱穴(P20～



第43図 SI2(建て替え後)



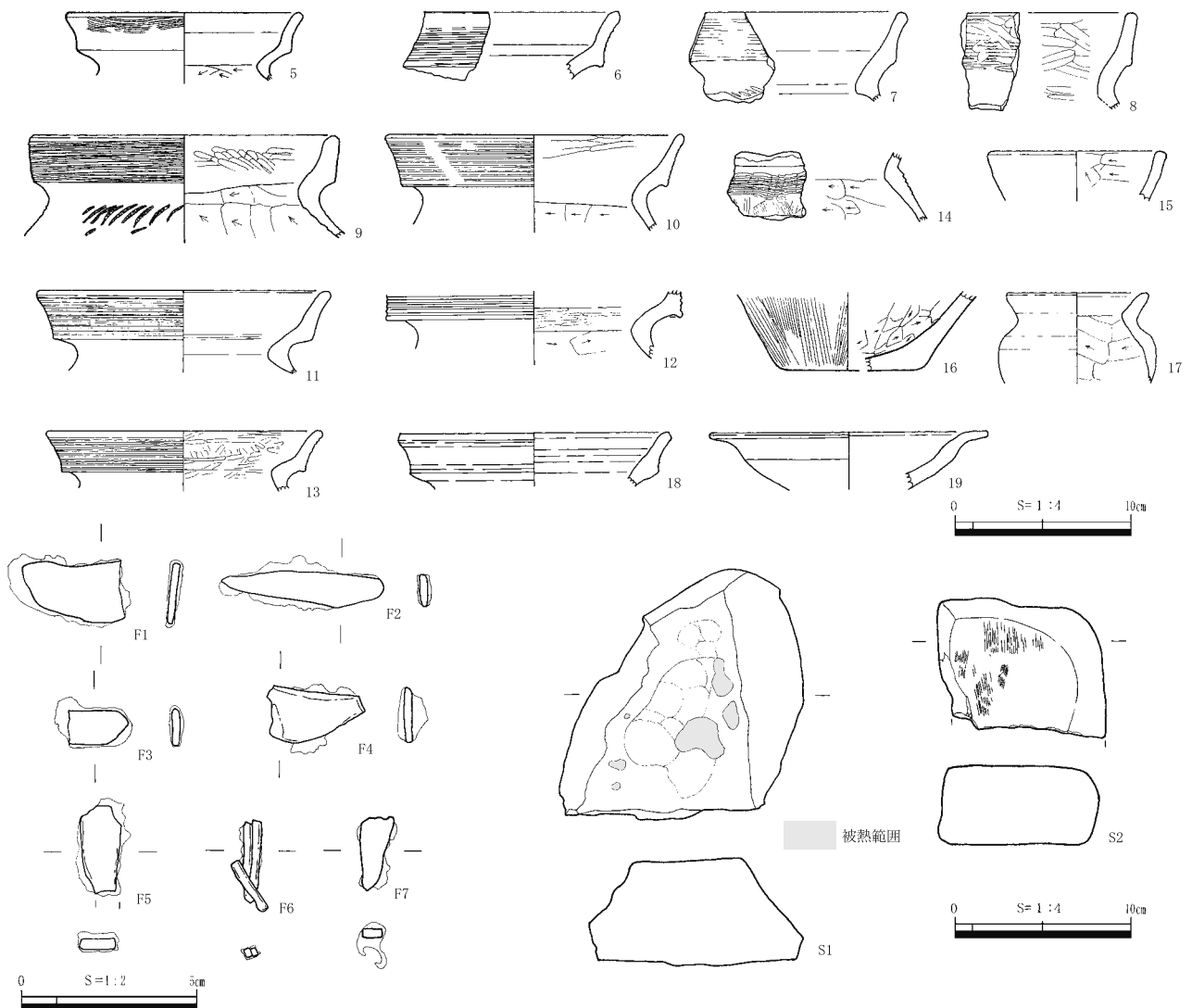
第44図 SI2 (建て替え前)

表3 SI2ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考	ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	28 × 34 - 53	柱痕径 16cm	P12	40 × 47 - 39	主柱穴、柱痕径 13cm
P2	40 × 47 - 66	柱痕径 20cm	P13	24 × 27 - 55	柱痕径 18cm
P3	36 × 41 - 56	柱痕径 22cm	P14	34 × 37 - 62	柱痕径 18cm
P4	44 × 45 - 53	柱痕径 20cm	P15	38 × 38 - 52	柱痕径 17cm
P5	54 × 56 - 66	柱痕径 18cm	P16	34 × 41 - 51	柱痕径 13cm
P6	35 × 42 - 71	柱痕径 12cm	P17	30 × 37 - 62	柱痕径 15cm
P7	44 × 54 - 67	柱痕径 15cm	P18	36 × 36 - 59	柱痕径 14cm
P8	34 × 36 - 61	柱痕径 19cm	P19	32 × 36 - 64	柱痕径 16cm
P9	30 × 32 - 60	主柱穴、柱痕径 13cm	P20	25 × 28 - 26	柱痕径 12cm
P10	32 × 39 - 44	主柱穴、柱痕径 13cm	P21	24 × 27 - 25	柱痕径 10cm
P11	25 × 31 - 36	主柱穴	P22	22 × 38 - 15	

22)がこれに付随する。住居壁際には断面U字形で、幅10cm程度、深さ5cmほどの壁溝が全周する。また、壁溝内部には等間隔に杭列が認められ、羽目板を固定するための構造と考えられる。中央ピットから壁溝に向かって幅10cm、深さ5cm程度の間仕切り溝が配置される。壁溝の形状から八角形の住居と想定される。

埋土の堆積状況は、地形的に高い位置にある南東側の住居壁際から埋もれ、その後住居中央部の窪地に、炭化物が混じる黒褐色シルトに黄褐色ロームブロック及び細粒が混ざった土がレンズ状に堆積



第45図 SI2出土遺物

している。

図化できた出土遺物の多くは黒褐色シルト埋土から廃棄された状況で出土したもので、弥生土器5～19、鉄器F1～F7、石器S1・2が出土している。床面直上からの出土は明確に認められない。貼床土中には微細な土器片が含まれる。第45図5～14・18は甕口縁部～頸部片、15は鉢、16は甕底部、17は小型壺、19は高坏である。F1～F7はすべて鍛造品の鉄器で、器種が判明するものは刀子F1のみで、ほかに刀子状F2、薄板状F3～F5、棒状F6・F7の器種不明の製品が含まれる。S1・2は台石である。

時期は出土遺物から、弥生V-3様式、弥生時代後期後葉ごろと考えられる。

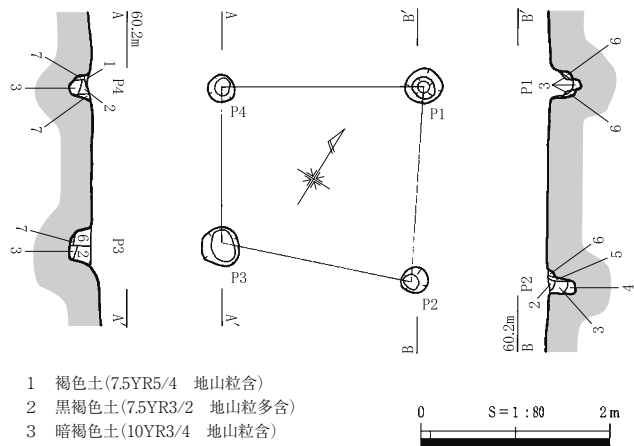
3 掘立柱建物跡

SB3 (第46図、表4、PL.12)

4区東側のD・E9グリッドをまたぎ、標高59.8m付近の平坦面に立地する。

桁行1間(2.03～2.16m)、梁行1間(1.77～2.04m)の構造を持ち、平面形は歪んだ方形を呈する。長軸はN-25°-W、平面積は約4㎡で、柱穴の規模は径28～40cm、深さ20～30cmである。柱間距離はP1-P2間から時計回りに2.04m、2.03m、1.77m、2.16mを測る。

柱穴には柱痕跡が確認され、そこから推定できる柱の径はいずれも10cmほどである。



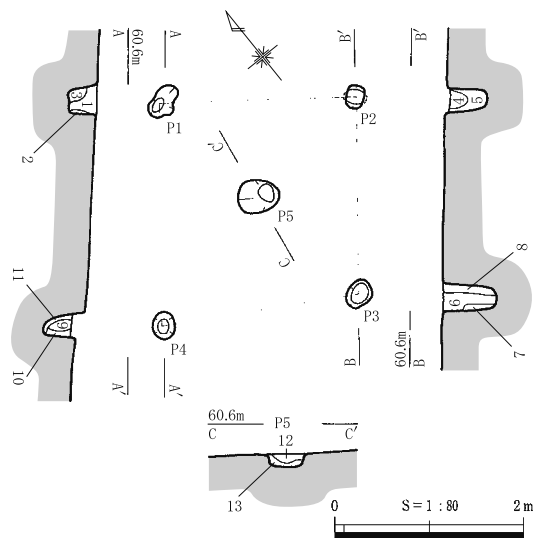
- 1 褐色土(7.5YR5/4 地山粒含)
- 2 黒褐色土(7.5YR3/2 地山粒多含)
- 3 暗褐色土(10YR3/4 地山粒含)
- 4 黒褐色土(7.5YR3/2 地山粒・炭化物含)
- 5 黒褐色土(7.5YR3/2 褐色土ブロック含)
- 6 褐色土(7.5YR4/4 暗褐色土含)
- 7 にぶい黄褐色土(7.5YR 地山粒含)

第46図 SB3

遺物が出土していないため本遺構の詳細な時期は不明であるが、近接するSI1とSB6は平面プラン及び規模が類似していることから弥生時代後期に属する可能性がある。

表4 SB3ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P1	38×38-28	柱痕径8cm
P2	28×28-27	柱痕径12cm
P3	42×38-24	柱痕径11cm
P4	29×26-20	柱痕径13cm



- 1 黒褐色土(10YR2/3 2～3mmの地山粒僅含)
- 2 褐色土(10YR4/6 地山粒多含)
- 3 暗褐色土(10YR3/4 土器片出土)
- 4 暗褐色土(10YR3/3 1～2mmの地山粒・AT粒僅含、炭化物含)
- 5 暗褐色土(10YR3/3)
- 6 黒褐色土(10YR2/3 1～2mmの地山粒僅含)
- 7 暗褐色土(10YR3/3 5mm程度の地山粒含、炭化物僅含)
- 8 暗褐色土(10YR3/4 1～2mm地山粒含)
- 9 黒褐色土(10YR2/3 2～6cmの地山ブロック多含、炭化物含)
- 10 暗褐色土(10YR3/3)
- 11 暗褐色土(10YR3/3 1～2cmの地山粒少含)
- 12 暗褐色土(10YR3/3 1cm程度の地山粒含、炭化物僅含)
- 13 褐色土(10YR4/6)

第47図 SB6

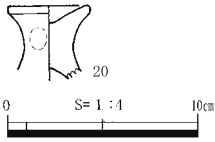
SB6 (第47・48図、表5、PL.12・36)

4区東側のD9グリッドに位置し、標高約60.3mのほぼ平坦面に立地する。北西側13mにSI1、北側7mにSB3が近接する。平面プランの中にはSK9が検出されている。

桁行1間(2.10～2.38m)、梁行1間(2.08～2.10m)、平面積は約4.7㎡を測る。長軸はN-27°-Eである。柱

表5 SB6ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	38×21-22	柱痕径12cm
P2	24×19-44	柱痕径18cm
P3	32×24-58	柱痕径10cm
P4	29×23-31	柱痕径10cm
P5	45×35-14	中央ピット?



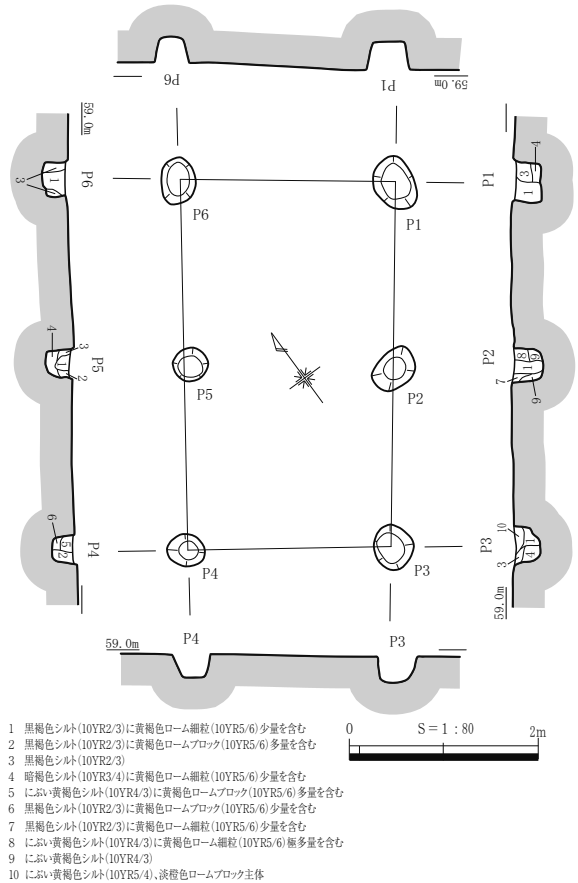
第48図 SB6出土遺物

1から12cm、18cm、10cm、10cmである。

遺物はP1から、弥生土器蓋20が出土している。

時期は、出土遺物から弥生V-3様式、弥生時代後期後葉と考えられる。近接するSI1とは时期的に大きな差はなく、P5を中央ピットとすると平面プランが酷似することから、本遺構は底面まで削平を受けた竪穴住居跡の可能性があり、SI1と共存するものであったことが推定される。

穴の底面のレベルには差があるが、P1～P4で柱痕跡を確認した。復元される柱の径はP1から12cm、18cm、10cm、10cmである。



第49図 SB10

SB10(第49図、表6、PL.12)

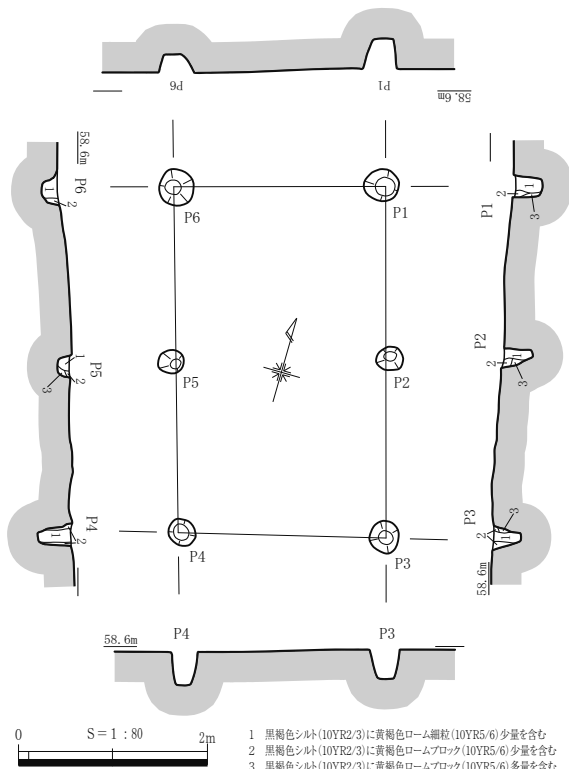
3区南東側O8・P8グリッドにあり、標高58.3～58.6mの緩やかに北側に傾斜する斜面に立地する。

桁行2間(3.6m)、梁行1間(2.2m)、平面積8.87㎡を測る。長軸はN-35°-Eである。柱穴掘方の規模は直径0.3～0.4m、深さ0.2～0.35mで、柱痕跡の径は10cm前後と推定される。

時期は遺物は出土していないが、柱穴の埋土や配置などから、弥生時代と推定される。

表6 SB10ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	57×42-29	柱痕径20cm
P2	50×37-31	柱痕径14cm
P3	49×42-26	柱痕径20cm
P4	41×35-25	柱痕径13cm
P5	36×35-29	柱痕径16cm
P6	48×36-27	柱痕径17cm

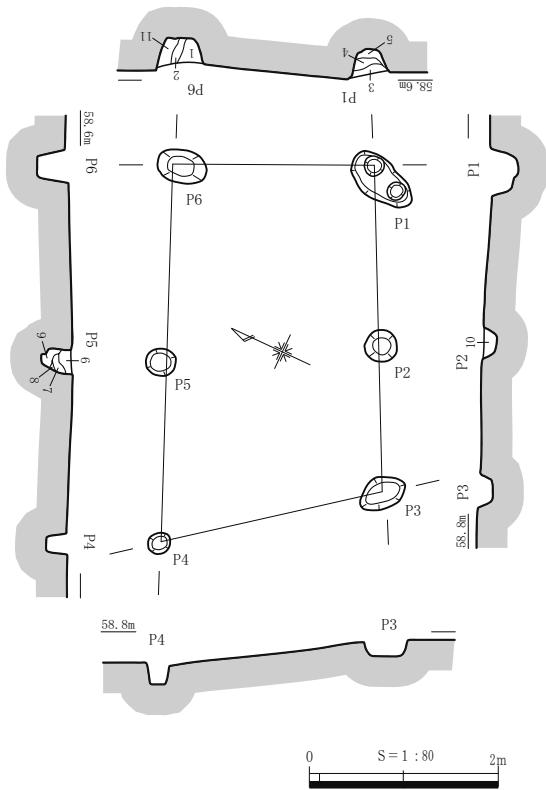


第50図 SB12

SB12(第50図、表7、PL.12)

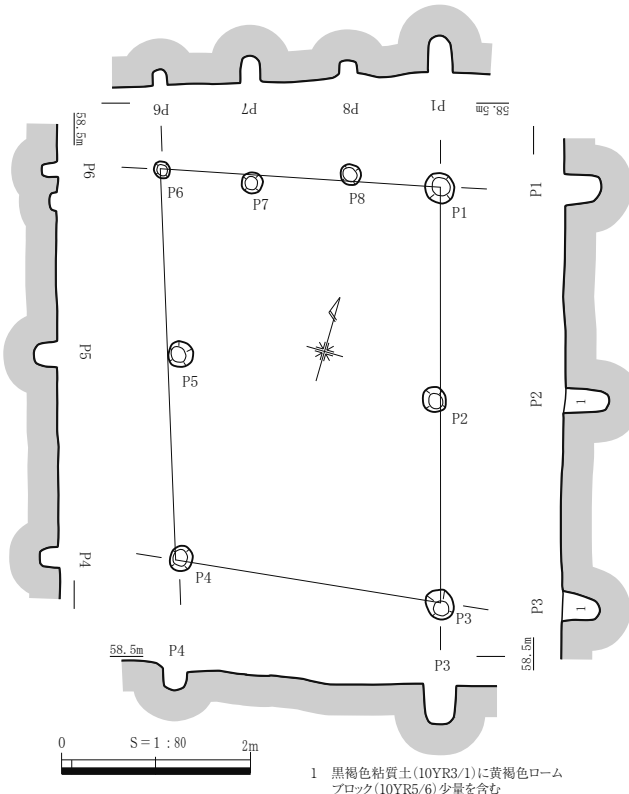
3区南東側N8グリッドにあり、標高58.5～58.6mのほぼ平坦面に立地する。

桁行2間(3.7～3.8m)、梁行1間(約2.1m)の



- 1 黒褐色シルト(10YR2/3)に黄褐色ローム細粒(10YR5/6)少量を含む
- 2 暗褐色シルト(10YR3/4)に黄褐色ローム細粒(10YR5/6)少量を含む
- 3 暗褐色シルト(10YR3/4)に黄褐色ローム細粒(10YR5/6)極少量を含む
- 4 暗褐色シルト(10YR3/4)、3より粘性強い
- 5 暗褐色シルト(10YR4/6)に黄褐色ロームブロック(10YR5/6)少量を含む
- 6 黒褐色シルト(10YR2/3)に黄褐色ローム細粒(10YR5/6)少量を含む
- 7 黒褐色シルト(10YR2/3)に黄褐色ロームブロック(10YR5/6)少量を含む
- 8 黒褐色シルト(10YR2/3)に黄褐色ローム細粒(10YR5/6)極少量を含む
- 9 黒褐色シルト(10YR2/1)に黄褐色ロームブロック(10YR5/6)少量を含む
- 10 暗褐色シルト(10YR3/4)に黄褐色ローム細粒(10YR5/6)少量を含む
- 11 黒褐色シルト(10YR2/3)に黄褐色ローム細粒(10YR5/6)少量を含む

第51図 SB13



- 1 黒褐色粘質土(10YR3/1)に黄褐色ロームブロック(10YR5/6)少量を含む

第52図 SB18

表7 SB12ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	31 × 36 - 31	柱痕径 14cm
P2	25 × 28 - 30	柱痕径 9 cm
P3	30 × 34 - 29	柱痕径 8 cm
P4	27 × 28 - 17	柱痕径 17cm
P5	23 × 27 - 15	
P6	35 × 38 - 35	柱痕径 12cm

掘立柱建物である。平面積は8.12㎡を測る。長軸はN-16°-Wである。柱穴掘方の規模は直径約0.3m、深さ0.15~0.35mを測る。柱痕跡の径は10cm前後と推定される。

時期は、遺物は出土していないが、柱穴の埋土や配置などから、弥生時代と推定される。

SB13(第51図、表8、PL.12)

3区南東側N7・N8・O7・O8グリッドにあり、標高58.8~58.9mのほぼ平坦面に立地する。

桁行2間(3.5~4.0m)、梁行1間(2.2~2.4m)、平面積は8.71㎡を測る。長軸はN-63°-Eである。柱穴掘方の規模は径約0.2~0.35m、深さ0.12~0.55mを測る。柱痕跡は確認できなかった。

時期は、遺物は出土していないが、柱穴の埋土や配置などから、弥生時代と推定される。

表8 SB13ピット一覧表

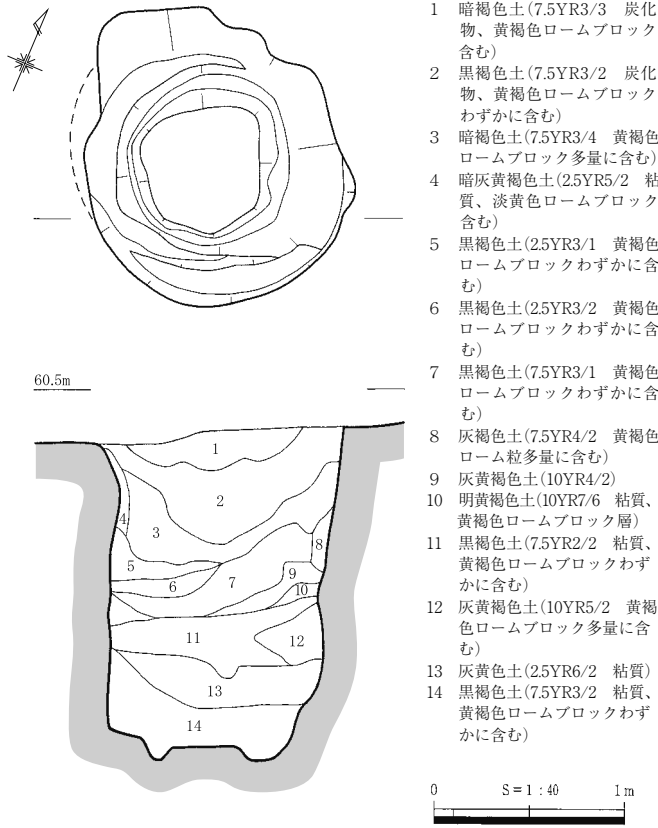
ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	20 × 21 - 26	
P2	32 × 34 - 12	
P3	33 × 50 - 55	
P4	22 × 22 - 23	
P5	28 × 30 - 31	
P6	35 × 52 - 26	

SB18(第52図、表9、PL.12)

3区南東側M8・M9グリッドにあり、標高58.8~58.9mのほぼ平坦面に立地する。

桁行2間(4.2~4.5m)、梁行1間(2.9~3.0m)、平面積12.06㎡を測る。長軸は、N-16°-Wである。柱穴掘方の規模は径約0.3m、深さ0.2~0.5mを測る。柱痕跡は確認していない。

時期は、遺物は出土していないが、柱穴の埋土と配置などから、弥生時代と推定される。



第53図 SK12

- 1 暗褐色土(7.5YR3/3 炭化物、黄褐色ロームブロック含む)
- 2 黒褐色土(7.5YR3/2 炭化物、黄褐色ロームブロックわずかに含む)
- 3 暗褐色土(7.5YR3/4 黄褐色ロームブロック多量に含む)
- 4 暗灰黄褐色土(2.5YR5/2 粘質、淡黄色ロームブロック含む)
- 5 黒褐色土(2.5YR3/1 黄褐色ロームブロックわずかに含む)
- 6 黒褐色土(2.5YR3/2 黄褐色ロームブロックわずかに含む)
- 7 黒褐色土(7.5YR3/1 黄褐色ロームブロックわずかに含む)
- 8 灰褐色土(7.5YR4/2 黄褐色ローム粒多量に含む)
- 9 灰黄褐色土(10YR4/2)
- 10 明黄褐色土(10YR7/6 粘質、黄褐色ロームブロック層)
- 11 黒褐色土(7.5YR2/2 粘質、黄褐色ロームブロックわずかに含む)
- 12 灰黄褐色土(10YR5/2 黄褐色ロームブロック多量に含む)
- 13 灰黄色土(2.5YR6/2 粘質)
- 14 黒褐色土(7.5YR3/2 粘質、黄褐色ロームブロックわずかに含む)

表9 SB18ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	31 × 32 - 40	
P2	25 × 26 - 47	
P3	28 × 32 - 40	
P4	24 × 27 - 20	
P5	25 × 27 - 24	
P6	16 × 18 - 16	
P7	22 × 23 - 30	
P8	22 × 23 - 15	

4 貯蔵穴

SK12(第53図、PL.13)

4区南東側のF9グリッドにあり、標高約60.2mの平坦面に立地する。東側約1mには、S11がある。調査時は、湧水が著しかった。

平面形はほぼ円形で、上縁部で長軸1.55m、短軸1.35mを測る。深さは1.75mを測り、断面形は、一部袋状になるが長方形を呈す。底面も円形で、長軸0.65m、短軸0.62mを測る。底面には、幅10～20cm、深さ3～5cmを測る溝が全周している。

埋土は、14層に分層できた。黒褐色土系の埋土が主体となっている。上層はレンズ状の堆積であるが、第11層以下は水平堆積となる。

出土遺物がないため、詳細な時期は不明であるが、形態的な特徴及び周辺の遺構のあり方から弥生時代の貯蔵穴と考えられる。

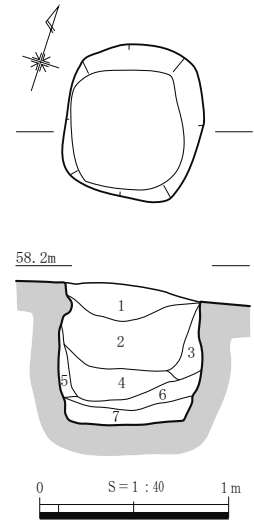
SK51(54図、PL.13)

3区東側O7グリッドにあり、標高58.1mの平坦面に立地する。

平面形は不整な隅丸方形を呈し、長軸0.82m、短軸0.71mを測る。断面形は長方形を呈し、検出面から土坑底面までの深さは0.73mを測る。

埋土は黒褐色シルトを主体とし、レンズ状に堆積する。

遺物は出土していないが、形態的特徴及び周辺の遺構の状況から弥生時代の貯蔵穴と推定される。



- 1 黒褐色土(10YR2/2 シルト)
- 2 黒褐色土(10YR2/2 シルト。ローム細粒を含む)
- 3 黒褐色土(10YR2/2 シルト)ローム細粒を含む。2より粘性強
- 4 黒褐色土(10YR2/2 シルト。ローム細粒を含む。3より粘性強)
- 5 暗褐色土(10YR3/4 シルト)
- 6 暗褐色土(10YR3/4 シルト。5より粘性強)
- 7 黄褐色土(10YR5/6 粘土質シルト。ロームブロック主体)

第54図 SK51

SK57(第55図、PL.13)

3区南東側O8グリッドにあり、標高58.8mの平坦面に立地する。

平面形は円形を呈し、直径0.8mを測る。断面形は長方形を呈し、検出面から土坑底面までの深さは1.06mを測る。

埋土は黒褐色シルトを主体とし、レンズ状に堆積する。

遺物は出土していないが、形態的特徴、埋土状況及び周辺遺構の状況から弥生時代の貯蔵穴と推定される。

5 土坑

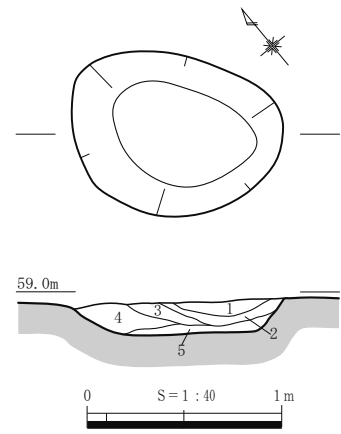
SK47(第56図、PL.13)

3区南東側N9グリッドにあり、標高58.4mの平坦面に立地する。

平面形は不整楕円形を呈し、長軸1.04m、短軸0.88mを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面から土坑底面までの深さは0.17mである。遺構上部は削平により大きく失われており、土坑底面付近のみが遺存する。

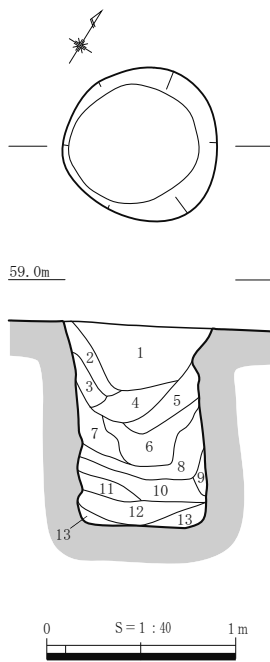
埋土は黒褐色シルトが主体となる。

遺物は出土していないが、埋土の状況及び周辺遺構の状況から弥生時代のものと推定される。性格は不明である。



- 1 黒褐色砂質シルト(10YR2/3) 白色砂粒を含む
- 2 黒褐色シルト(10YR2/3)
- 3 黒褐色砂質シルト(10YR2/3) 白色砂粒を含む
- 4 黒褐色砂質シルト(10YR2/3) 3よりしりあり
- 5 黒褐色シルト(10YR2/3)

第56図 SK47



- 1 黒褐色土(5YR2/2 シルト)
- 2 にぶい黄褐色土(10YR4/3 シルト。ロームブロックを含む)
- 3 にぶい黄褐色土(10YR4/3 シルト。2より大きめのロームブロックを含む)
- 4 黒褐色土(10YR2/3 シルト。ローム細粒を含む)
- 5 黒褐色土(10YR2/3 シルト。4よりローム細粒を多く含む)
- 6 黒褐色土(10YR2/3 シルト。3・4より粘性あり)
- 7 にぶい黄褐色土(10YR4/3 シルト。ロームブロックを含む)
- 8 暗褐色土(10YR3/4 シルト)
- 9 暗褐色土(10YR3/4 シルト。8より粘性あり)
- 10 黒褐色土(10YR2/3 シルト。ローム細粒を含む)
- 11 にぶい黄褐色土(10YR4/3 シルト。ロームブロック主体)
- 12 暗褐色土(10YR3/4 シルト)
- 13 黒褐色土(10YR2/2 シルト)

第55図 SK57

3区南東側M8・M9グリッドにあり、標高58.3mの平坦面に立地する。

平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.31m、短軸0.97mを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面から土坑底面までの深さはわずかに8cmを測る。遺構上部は後世の削平により大きく失われており、土坑底面付近のみが遺存する。

埋土は暗褐色シルトが主体となる。

遺物は出土していないが、埋土の状況及び周辺遺構の状況から弥生時代のものと推定される。性格は不明である。

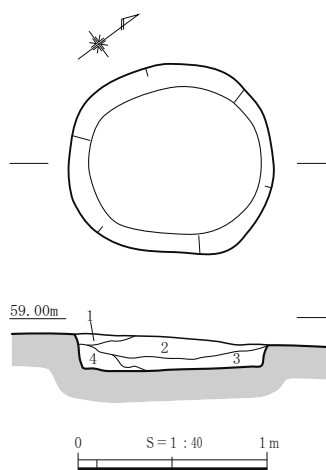
SK48(第57図、PL.13)

3区南東側O8グリッドにあり、標高58.9mの平坦面に立地する。

平面形は円形を呈し、直径1.0mを測る。断面は長方形を呈し、検出面から土坑底面までの深さは0.2mを測る。遺構上部は削平により大きく失われており、土坑底面付近のみが遺存する。

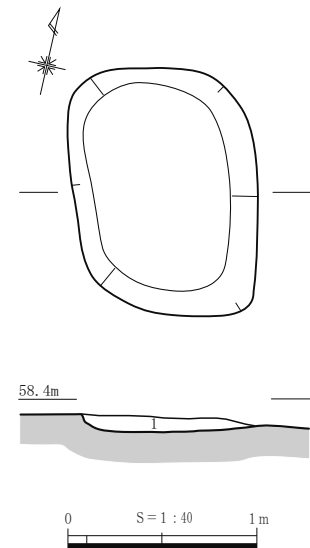
埋土は黒褐色シルトが主体となる。

遺物は出土していないが、埋土の状況及び周辺遺構の状況から弥生時代のものと推定される。性格は不明である。



- 1 黒褐色土(10YR2/3 シルト)
- 2 黒褐色土(10YR2/3 シルト。ロームブロックを含む)
- 3 黒褐色土(10YR2/3 シルト。2に類似。2よりしりあり)
- 4 黒褐色土(10YR2/3 シルト。3より粘性強)

第57図 SK48



- 1 暗褐色土(10YR3/4 シルト。ロームブロックを含む)

第58図 SK49

第5節 古代の調査成果

1 概要(第59図)

古代の遺構は、概ね調査区の南西側の斜面部に集中して見られる。検出した遺構は、3区で掘立柱建物跡4棟(SB1・4・5・7)、性格不明土坑3基(SK15・20・21)、1区で掘立柱建物跡3棟(SB16・17・19)、段状遺構3基(SS1～3)、土壙墓1基(SK73)、製塩土器廃棄土坑1基(SK75)、性格不明土坑1基(SK46)、ピット群1箇所(ピット群9)である。

掘立柱建物跡は、圃場整備の削平等で遺存状態が悪く、また調査区外へ延びているものが多く、全体を調査できたものがない。また、SB1・7が重複して立地する3区V6グリッド周辺には、その他に多数のピットが存在しており、今後調査を予定している2区の調査を待ってさらに掘立柱建物跡が増える可能性がある。確認した建物については、規模、出土遺物からも官衙的な様相は見られず、古代の一般集落の形態をなしていると考えられる。

判明している限りでは、掘立柱建物跡は重複関係が認められることから、同時には存在しておらず、出土遺物から7世紀末から8世紀中ごろに造営されたと考えられる。

また、1区では製塩土器(焼塩土器)を廃棄したSK75を検出しており、一般集落内での塩の流通を考える上で、重要な資料を得ることができた。

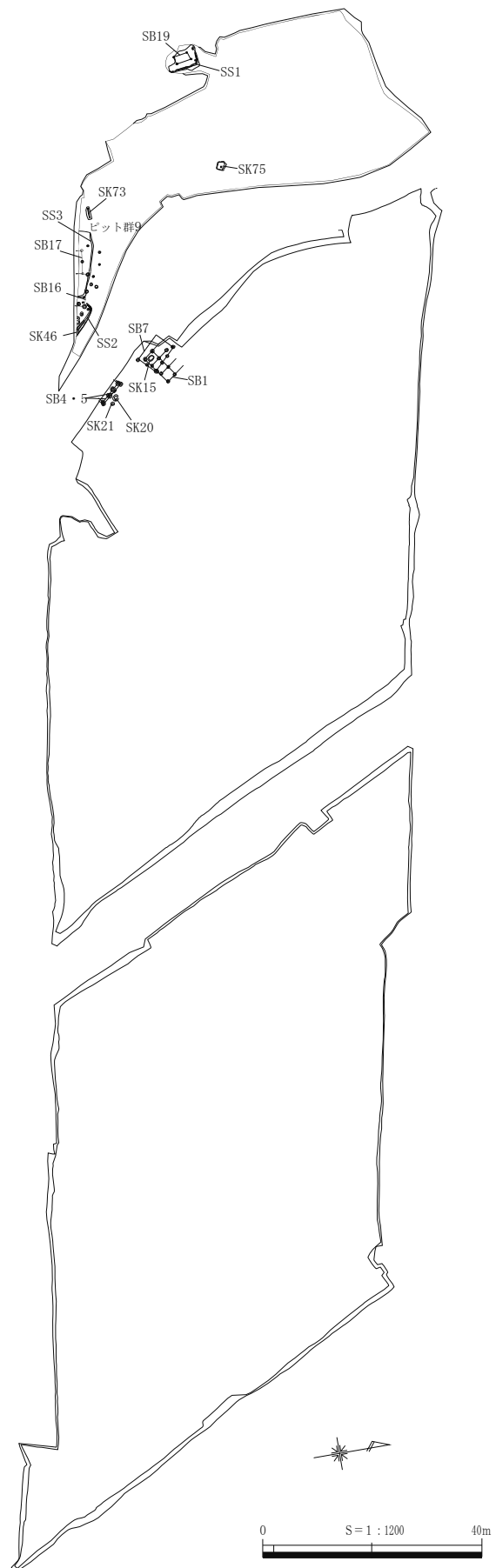
2 掘立柱建物跡

SB1(第60・61図、表10、PL.14・38・42)

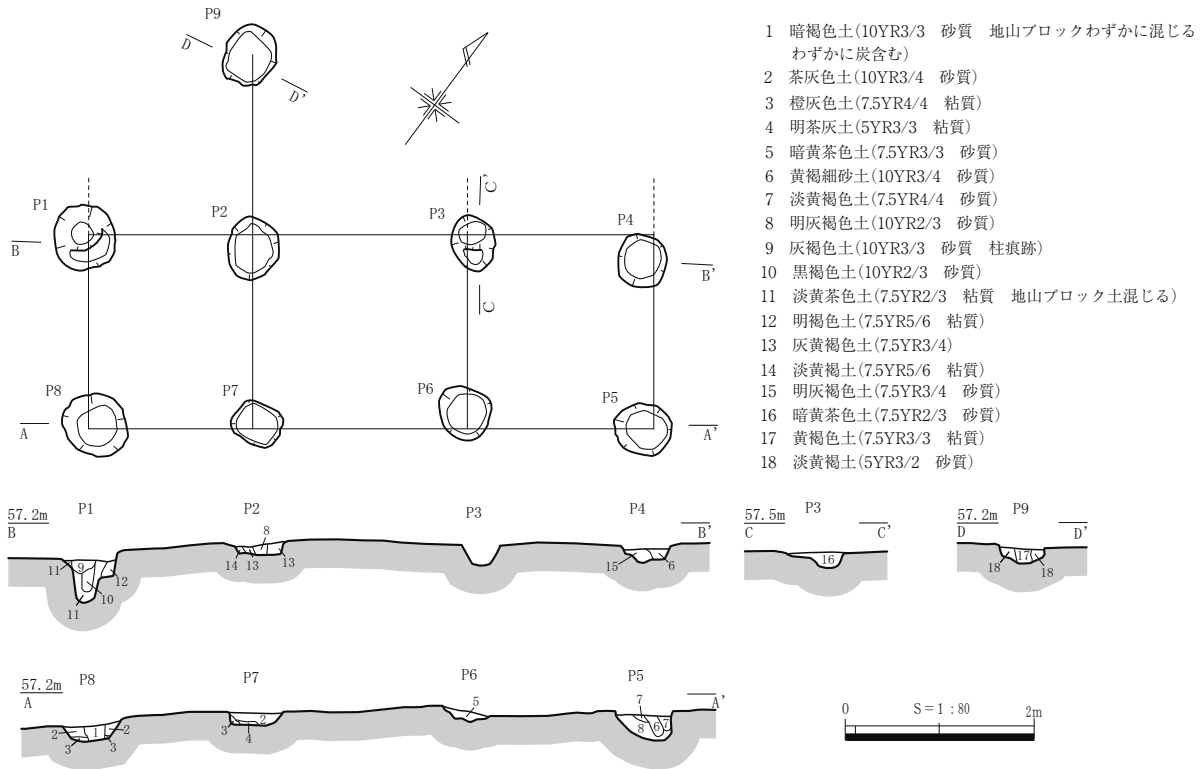
3区西側のV6グリッドにあり、標高56.8～57.0m付近の平坦面に立地する。SB7と重複するがSB1と新旧関係は不明である。

P3とP4の北側は圃場整備により削平を受けており、本来は桁行3間(5.9m)、梁行2間(4.0m)以上の規模を持つ総柱建物であったと推定される。柱間は1.8～2.1mである。長軸方向はN-56°-Eである。柱穴径は50～70cm、深さ10～50cmを測る。

P1・P2・P4・P5・P8・P9で柱痕跡を確認し



第59図 古代遺構分布図



第60図 SB1

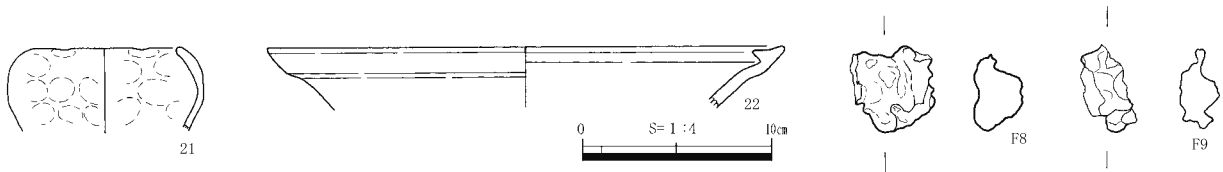
たが、復元される柱径は13～22cmである。

出土遺物はP2埋土から椀形鍛冶滓F8・F9、P7埋土から製塩土器21、P9検出時に須佐焼片22が出土した。22は後世の混入品である。

正確な時期は不明であるが、出土遺物から奈良時代のもと考えられる。

表10 SB1ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	64 × 68 - 49	柱痕径 13cm
P2	57 × 68 - 15	柱痕径 15cm
P3	45 × 53 - 17	
P4	53 × 55 - 18	柱痕径 21cm
P5	58 × 58 - 31	柱痕径 13cm
P6	52 × 57 - 13	
P7	52 × 55 - 14	
P8	68 × 70 - 18	柱痕径 22cm
P9	54 × 63 - 19	柱痕径 18cm



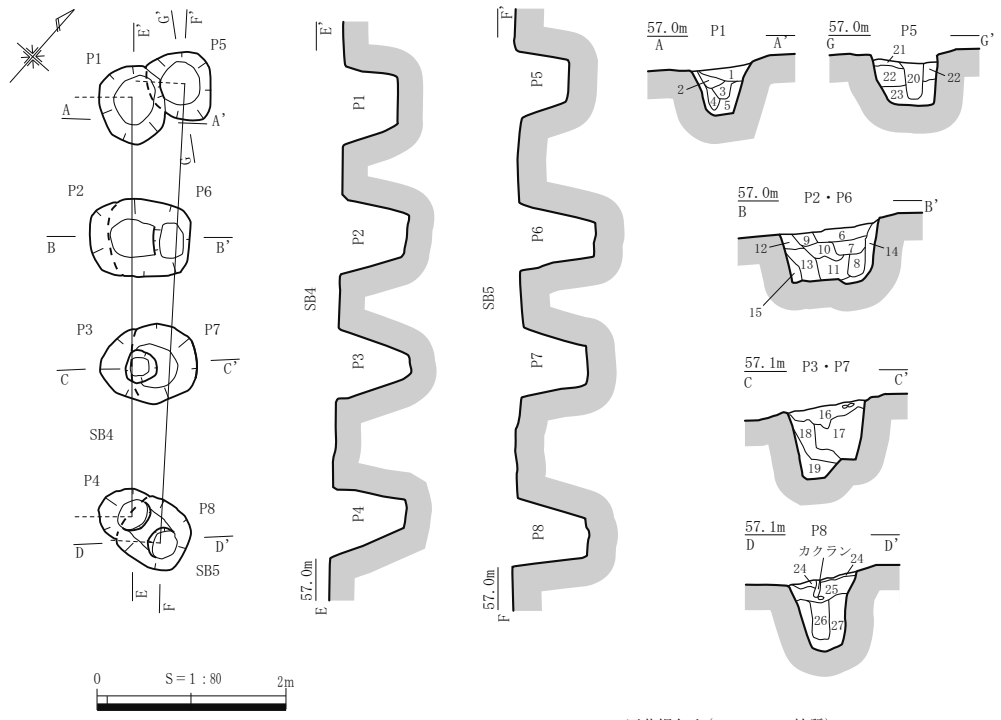
第61図 SB1出土遺物

SB4・5(第62・63図、表11、PL.14・38・42)

3区西側のV7グリッドにあり、標高56.6～56.9mの西側に傾斜する斜面に立地する。

SB4・5とも東側の桁筋の南北3間分を検出したが、梁筋に当たる部分は今年度調査区外の2区に延びていると考えられ、確認できなかった。柱穴埋土の土層観察により、SB4を埋め戻した後、SB5に建て替えていることが判明した。

SB4の長軸方向はN-48°-E、SB5の長軸方向はN-51°-Eである。柱穴径はSB4・5と



- 1 暗褐色土(10YR4/4 砂質 灰色ブロック土混じる)
- 2 黄褐色土(7.5YR4/4 粘質)
- 3 暗黄褐色土(10YR3/4 粘質)
- 4 暗灰褐色土(10YR4/6 砂質)
- 5 灰褐色土(10YR4/4 砂質)
- 6 黄褐色土(10YR3/3 砂質)
- 7 暗黄褐色土(10YR3/4 砂質)
- 8 灰褐色土(10YR4/4 シルト 地山ブロック土混じる)
- 9 淡黄褐色土(7.5YR3/3 粘質)
- 10 灰褐色土(7.5YR2/3 粘質 地山ブロック土混じる)
- 11 暗褐色土(7.5YR3/4 粘質 地山ブロック土混じる)
- 12 淡灰黄褐色土(7.5YR4/4 粘質)
- 13 橙灰色土(7.5YR4/6 粘質)
- 14 灰黄褐色土(10YR2/3 粘質)
- 15 淡灰褐色土(10YR2/2 砂質 地山ブロック土混じる)
- 16 黄褐色土(10YR3/4 砂質)
- 17 暗灰色土(10YR2/3 粘質 地山ブロック土混じる)
- 18 淡褐色土(7.5YR3/3 粘質 地山ブロック土混じる)
- 19 暗灰褐色土(7.5YR2/2 シルト)
- 20 黄褐色土(10YR3/4 シルト)
- 21 明黄褐色土(10YR3/3 シルト)
- 22 灰褐色土(7.5YR2/3 砂質 地山ブロック土混じる)
- 23 暗黄褐色土(7.5YR3/3 粘質 地山ブロック土混じる)
- 24 淡灰褐色土(7.5YR3/4 シルト)
- 25 灰褐色土(10YR3/4 シルト)
- 26 暗褐色土(10YR2/3 シルト 地山ブロック土混じる)
- 27 暗灰褐色土(10YR4/4 シルト 地山ブロック土混じる)

第62図 SB4・5

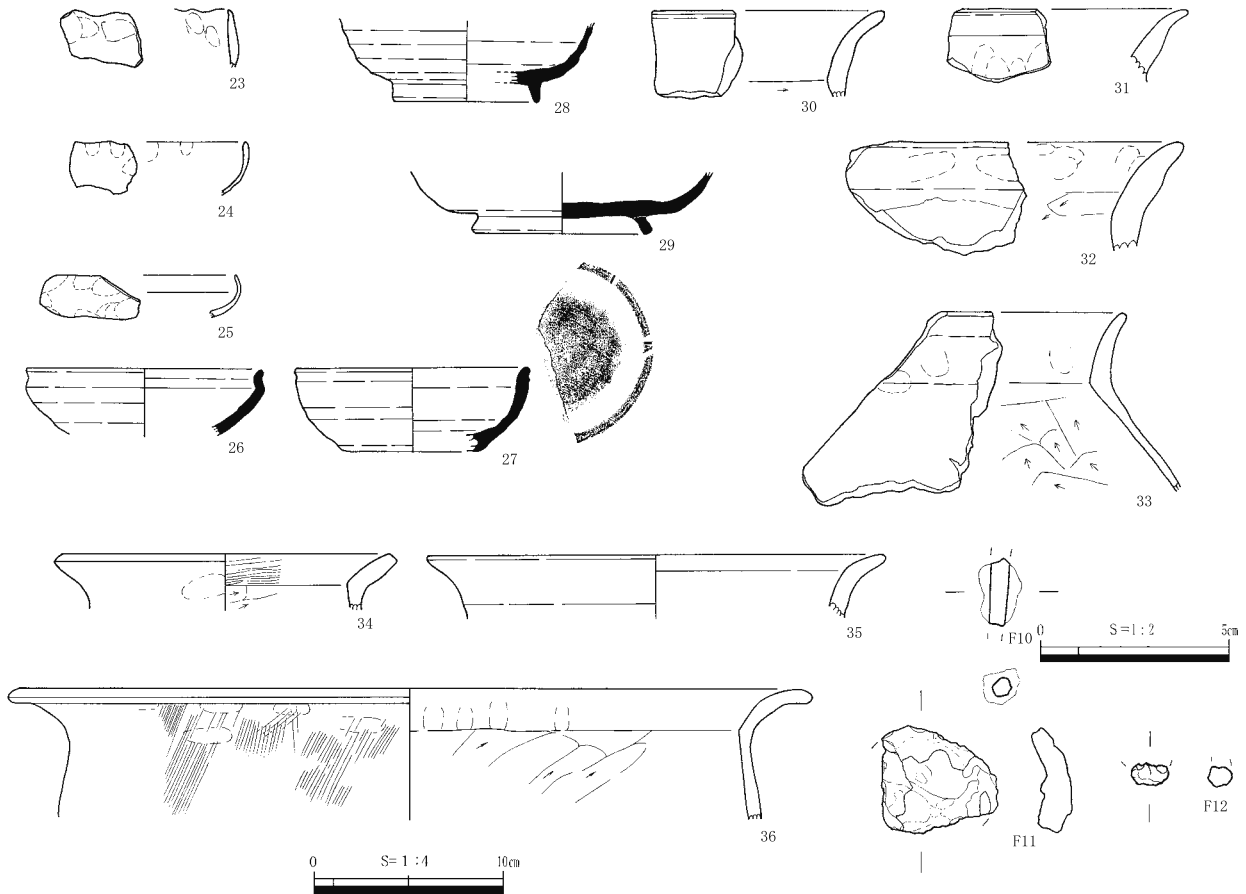
も 60～80cm、深さ 50～80cm を測る。SB 4 の柱間は約 1.5 m であるが、SB 5 の柱間は 1.5～1.8m あり、建て替え時に面積をやや拡張したと考えられる。SB 4 の P 1、SB 5 の P 5・P 6・P 8 で柱痕跡を確認した。復元される柱径は 10～20cm である。

出土遺物は、SB 4 P 2 から製塩土器24、須恵器高台付坏29、P 4 から製塩土器23、土師器甕34、椀形鍛治滓F11が出土した。SB 5 P 5 からは須恵器坏身26、土師器甕30・35、鉄製棒状不明品F10、椀形鍛治滓F12、P 6 から製塩土器25、須恵器坏身27、土師器甕36、P 8 からは土師器甕32が出土した。出土状況からSB 4・5 のいずれかに属する出土遺物として、須恵器高台付坏28、土師器甕33がある。

時期は、出土遺物から7世紀末から8世紀と考えられる。

表11 SB4・5ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	67 × 84 - 53	SB4、柱痕径 18cm
P2	60 × 82 - 52	SB4
P3	65 × 80 - 75	SB4
P4	55 × 75 - 80	SB4
P5	65 × 73 - 55	SB5、柱痕径 20cm
P6	80 × 85 - 61	SB5、柱痕径 18cm
P7	75 × 80 - 61	SB5
P8	70 × 70 - 76	SB5、柱痕径 17cm



第63図 SB4・5出土遺物

SB7 (第64・65図、表12、PL.14・72)

3区西側のV6グリッドにあり、標高56.7～57.0mの平坦面に立地する。SB1と重複するが新旧関係は不明である。

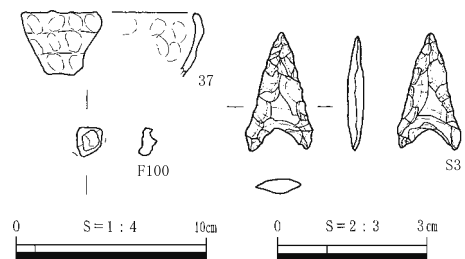
確認した範囲で桁行3間(約5.4m)、梁行2間(約3.9m)、柱間1.6～1.9mである。長軸方向はN-38°-Wである。柱穴径は50～70cm、深さ50～70cmを測る。すべての柱穴で柱痕跡を確認しており、復元される柱径は12～20cmである。

P1埋土中から製塩土器37、椀形鍛冶滓F100、P4埋土中から石鏃S3が出土した。

出土遺物から、時期は8世紀ごろと考えられる。

表12 SB7ピット一覧表

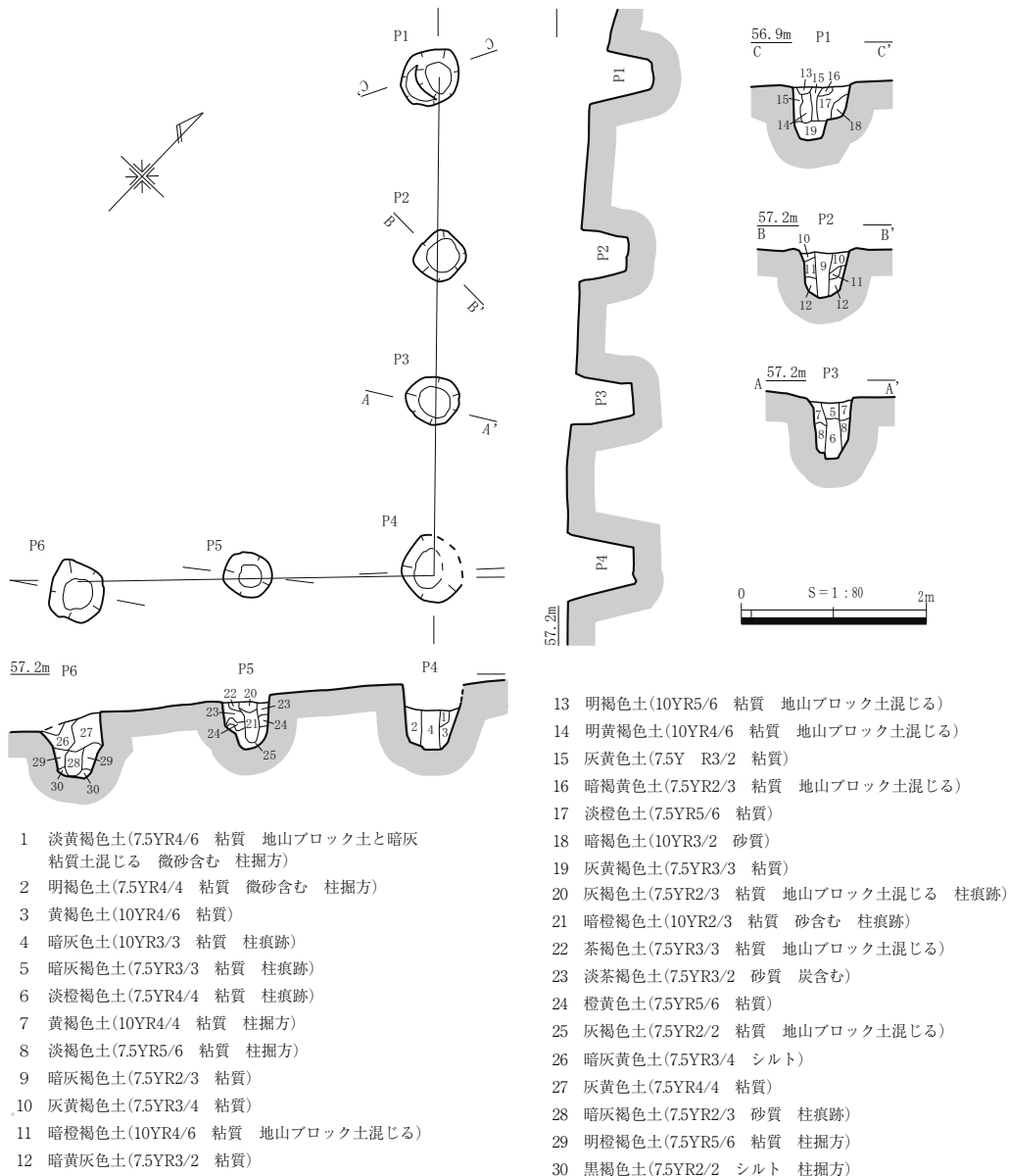
ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	58 × 67 - 60	柱痕径 12cm
P2	50 × 50 - 53	柱痕径 18cm
P3	50 × 56 - 67	柱痕径 16cm
P4	65 × 72 - 71	柱痕径 20cm
P5	47 × 53 - 52	柱痕径 15cm
P6	58 × 63 - 66	柱痕径 18cm



第64図 SB7出土遺物

SB16(第66・67図、表13、PL.15・37)

1区南側のW・X7グリッド、標高53.5m付近の平坦面に位置する。SS2、SS3の埋土を掘り下げた段階で検出しており、SS2・3との切り合い関係は不明である。調査区内で検出できたのは柱穴1列のみで、建物の中心は南側調査区外に存在すると考えられる。

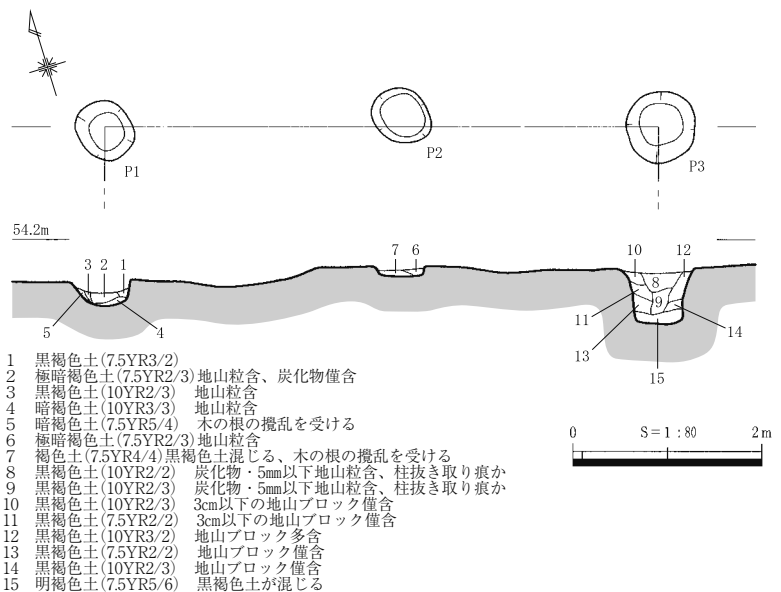


第65図 SB7

検出した範囲では桁行2間、長さ6.56mで、長軸方向はN-74°-Wである。柱穴の規模は、径56～72cm、深さは14～58cmを測る。

柱穴埋土は、暗褐色から黒褐色土で地山粒を含んでおり、P3の土層断面において確認された柱痕跡から復元できる柱径は16cmである。

P2埋土中から須恵器坏蓋38が



第66図 SB16

出土した。

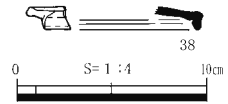
出土遺物から、本遺構は8世紀前半と考えられる。

表13 SB16ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	62 × 56 - 26	
P2	56 × 56 - 14	
P3	74 × 72 - 58	柱痕径 15cm

SB17(第68・69図、表14、PL.15・37)

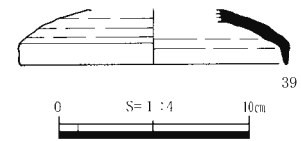
1区南側X7グリッド、標高53.9m付近の平坦面に位置する。SS3の埋土を掘り下げた段階で検出したため、SS3との切り合い関係は不明である。調査区内で検出できたのは柱穴1列のみであるが、建物は南側調査区外へ延びるものと推定される。



第67図 SB16出土遺物

検出した範囲では桁行2間、長さは4.6mで、長軸方向はN-83°-Wである。柱穴の規模は径36~46cm、26~38cmを測る。

柱穴埋土は褐色から黒褐色土で地山粒を含む。P1・P3で柱痕跡が確認され、そこから復元できる柱径はおよそ13cmである。



第68図 SB17出土遺物

P2埋土中から須恵器坏蓋39が出土した。

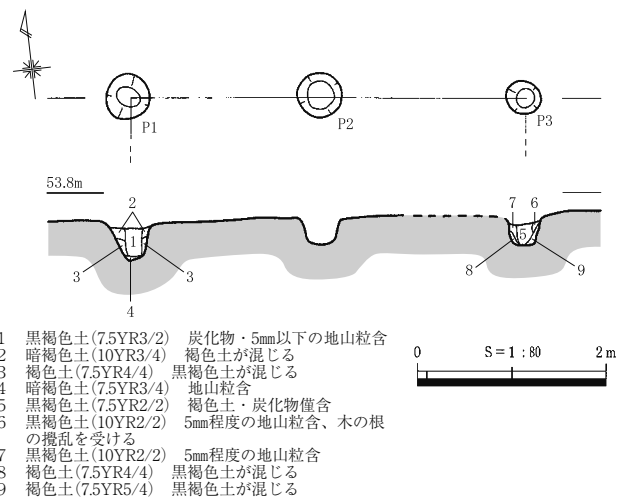
出土遺物から、本遺構の時期は8世紀前半と考えられる。

3 段状遺構

SS1・SB19(第70・71図、表15、PL.15)

1区南西側のa4・5、b4・5グリッドにあり、標高47.5~48.6mの斜面部に立地する。竹根が繁茂していたため、遺構の底面を検出した段階で確認した。斜面部にあるため、西側及び南側は流失している。

本遺構は、斜面部を幅5.6m、深さ最大0.79m掘削して平坦面を造る。底面は長さ5.2m、幅3.08m以上を測る。壁際には幅9~35cm、深さ2cm程度の溝が掘り込まれている。



第69図 SB17

平坦面には、桁行1間(2.5~2.7m)、梁行1間(1.3~1.45m)の掘立柱建物跡SB19が造られている。長軸方向はN-9°-Wである。柱穴の規模は、径30~40cm前後、深さ15~35cmである。

表14 SB17ピット一覧表

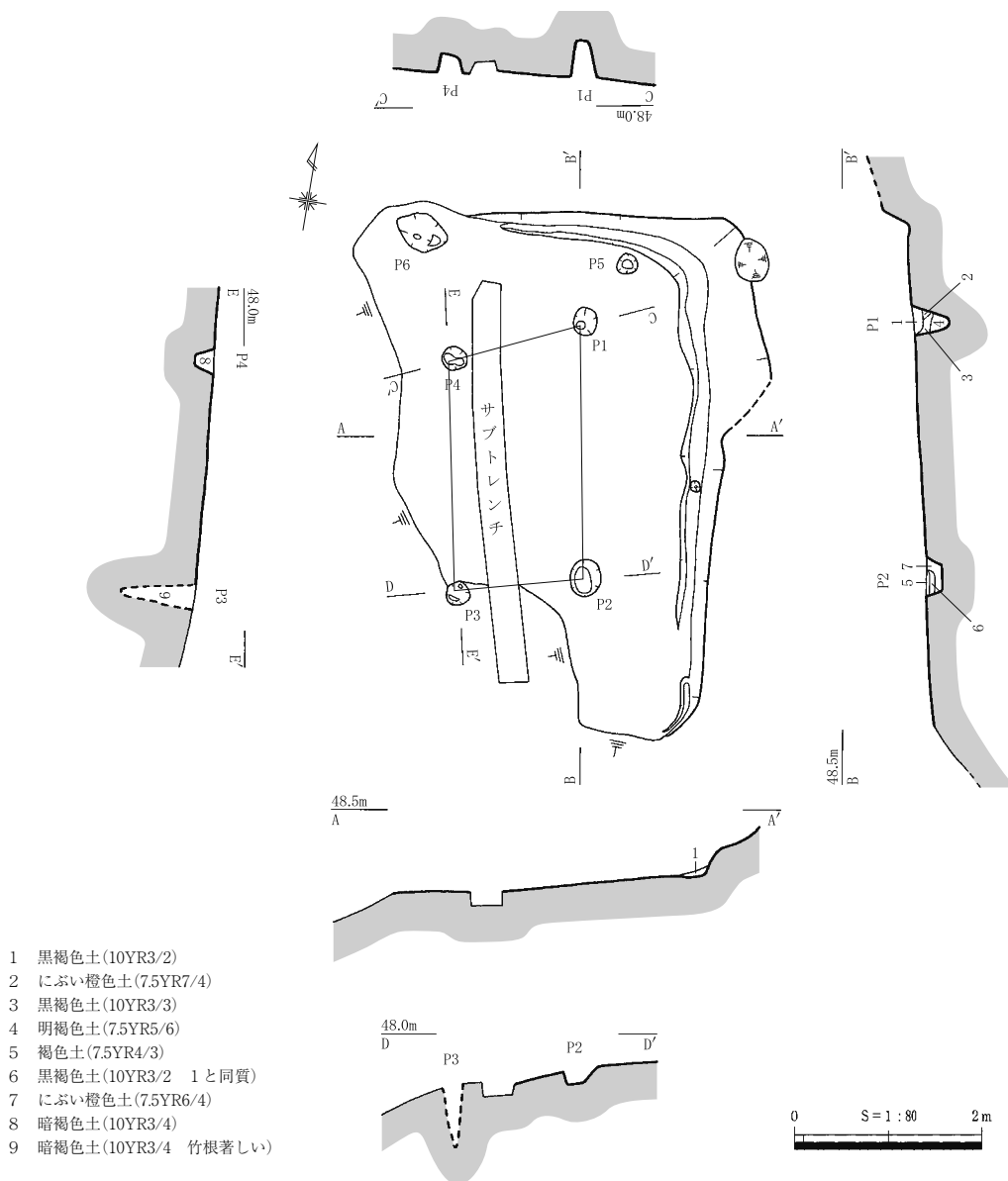
ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	46 × 44 - 38	柱痕径 15cm
P2	46 × 45 - 26	
P3	37 × 36 - 26	柱痕径 11cm

その他、北側壁際で柱穴と同規模のP5、柱穴より規模が大きいP6があるが、用途は不明である。

SS1の埋土は、竹根が繁茂していたため、詳細に観察することができなかったが、掘り下げ時の所見では暗褐色系の埋土であった。

表15 SS1・SB19ピット一覧表

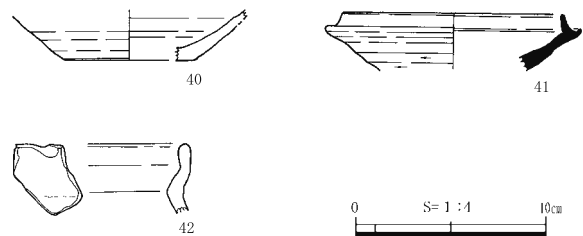
ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	32 × 24 - 37	SB19 柱穴
P2	38 × 34 - 17	SB19 柱穴
P3	26 × 24 - 12以上	SB19 柱穴
P4	27 × 27 - 22	SB19 柱穴
P5	23 × 22 - 24	
P6	60 × 38 - 20	



第70図 SS1・SB19

底面検出作業中に須恵器坏身41、土師器坏40、土師質土器鍋42が出土している。坏、鍋は中世、坏身はTK217 併行期と考えられる。

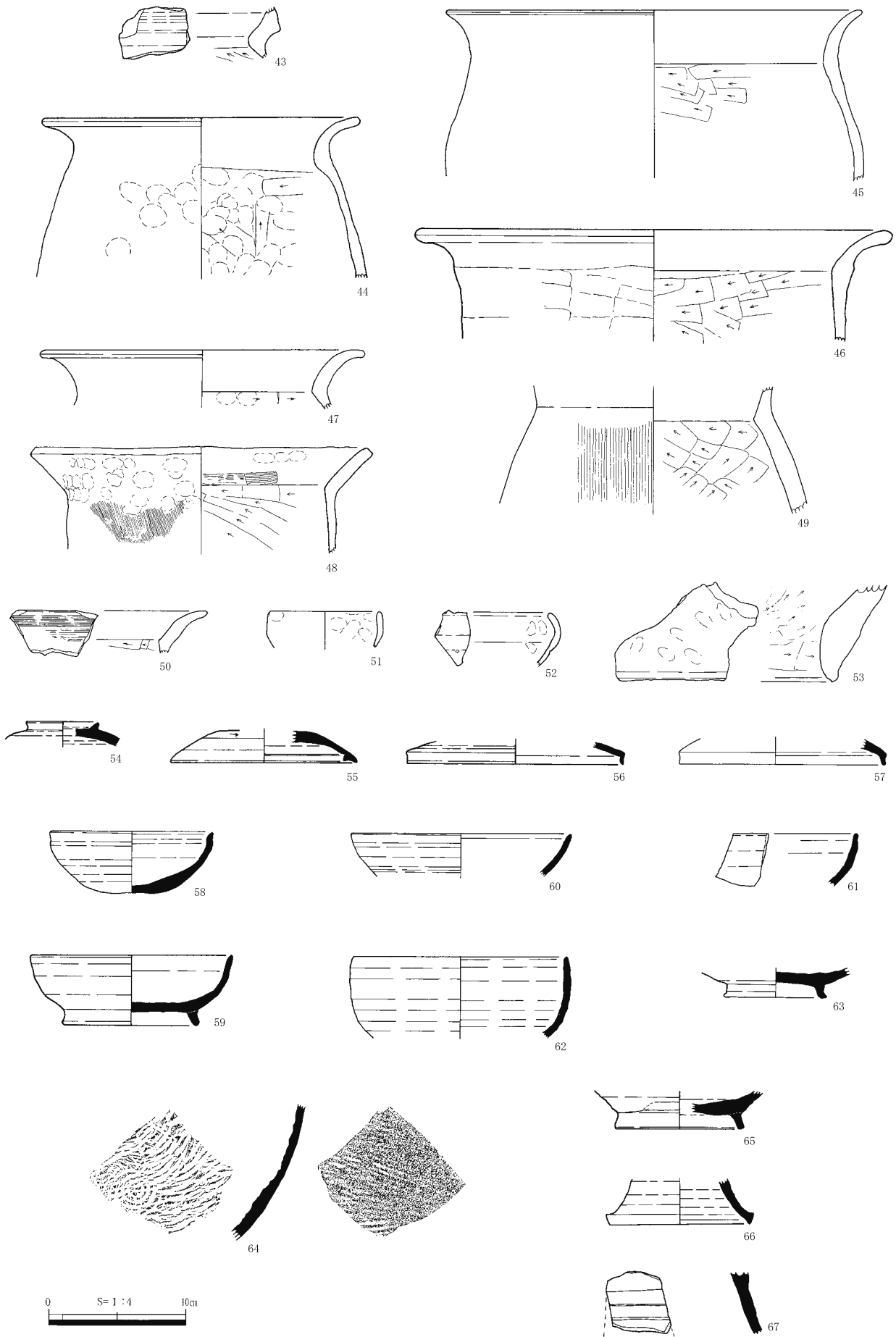
出土遺物は、古墳時代終末期から中世と幅広いもので、いずれも埋土中での出土であることから、本遺構に伴うものではないと考える。詳細な時期は不明であるが、周囲にはSS2・3等があり、当遺構についても古代の所産と考えたい。



第71図 SS1・SB19出土遺物

SS2 (第72～74図、 PL.16・39・40・42)

1区南東側のW7グリッド、標高約54.1mの平坦面に位置する。この平坦面は後世の削平の結果であり、旧地形は緩斜面であったと考えられる。遺構の東側は調査区壁際でSK46に、西側は隣接する



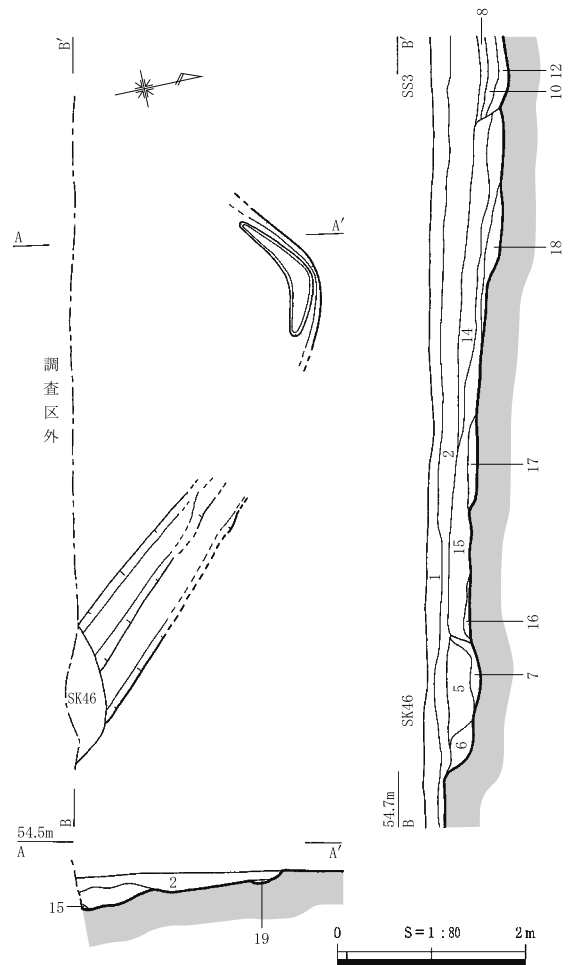
第72図 SS2出土遺物(1)

SS3に掘り込まれることを調査区壁の土層断面で確認した。遺構の底面でSB16の柱穴を検出した。

遺構は南側調査区外へ続くため正確な規模は不明であるが、検出した範囲では幅5.1m、深さ最大0.36mを測る。壁際には幅最大46cm、深さ最大7cmの溝が掘られ、東側の辺から遺構の角に沿って曲がっているのが確認できる。しかし、削平やSK46との重複のためこの溝がどこまで続くかは不明である。また、底面でピットを検出したが、本遺構に伴うものかは確認できなかった。

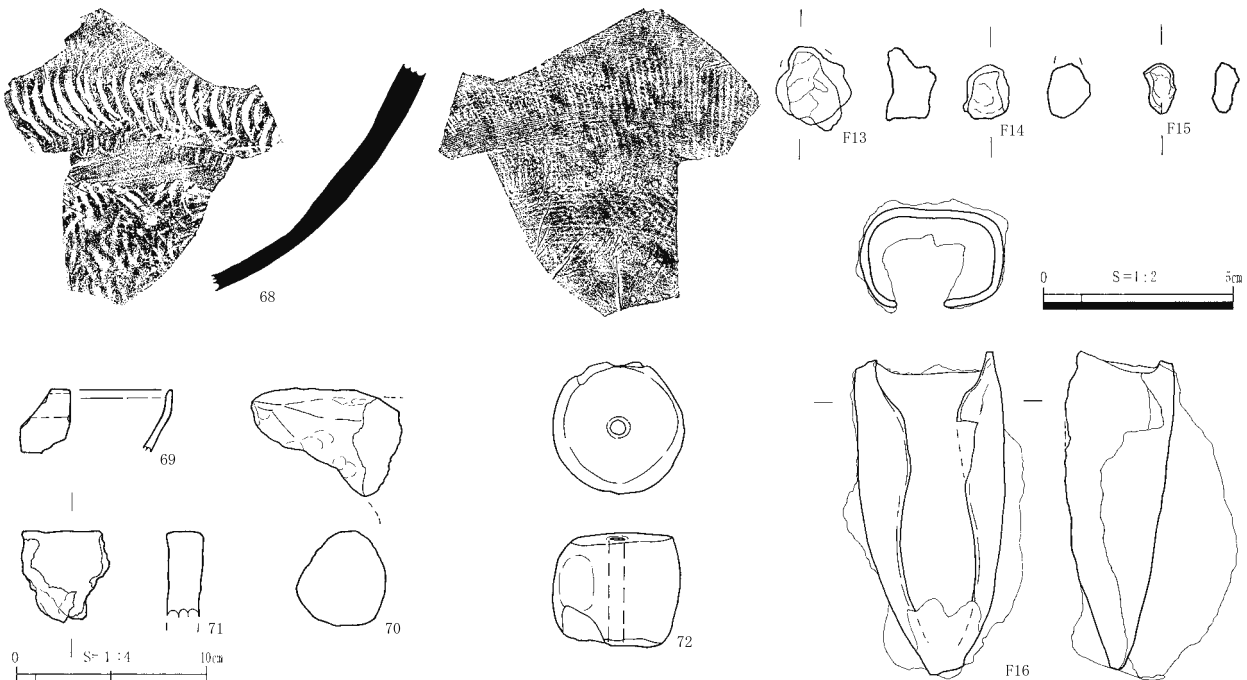
埋土は5層に分けられる。黒褐色から暗褐色土となっており、全体的に地山粒、炭化物が含まれる。堆積状況から東側から土砂が流入した自然堆積と考えられる。

遺物は上層から下層にかけて出土した。遺物の多くは古代のものであり、天目茶碗69は混入品である。埋土中からは土師器甕46・48、焼塩土器51・52、竈53、須恵器55・59・62・63・65～68、土製支脚70、平瓦71、椀形鍛冶滓F13・F14、鍛冶滓F15、袋状鉄斧F16が出土した。また東側の遺構壁際で土師器甕44・45・47・49・50、須恵器54・56～58・60・61・64、土玉72などが集中して出土している箇所があった。この遺物集中部では



- | | |
|----------------------------------|-----------------------------------|
| 1 黒褐色土(10YR2/3 炭化物含、3mm以下の地山粒少含) | 14 黒褐色土(10YR2/3 炭化物含) |
| 2 黒褐色土(10YR2/2 炭化物僅含、しまり強) | 15 黒褐色土(7.5YR2/2 炭化物含) |
| 3 暗褐色土(10YR3/3 3mm以下の地山粒少含) | 16 暗褐色土(7.5YR3/3 地山混じり、炭化物僅含) |
| 4 黒褐色土(10YR2/3 しまり弱) | 17 黒褐色土(7.5YR2/2 地山混じり) |
| 5 褐色土(10YR4/4) | 18 暗褐色土(7.5YR3/3 地山粒含) |
| | 19 黒褐色土(7.5YR3/2 径5～2mmの地山粒、炭化物含) |

第73図 SS2



第74図 SS2出土遺物(2)

上層から中層に遺物が多く、下層からはあまり出土が見られない。遺物集中部はSK46に隣接している。SK46の掘り込みについては、SS2 検出段階では認識できず、掘り下げ中に埋土と土層断面により確認したため、この集中部の遺物の中には、本来SK46に伴っていたものが含まれる可能性がある。

埋土下層から出土した須恵器の坏蓋55、高台坏63がMT21併行期のものと考えられることから、本遺構の時期は、7世紀末から8世紀初頭に位置づけられる。

SS3 (第75・76図、PL.16・41・42)

1区南側のX・Y7グリッド、標高54.0m付近の平坦面に位置しているが、旧地形は緩斜面であったと考えられる。SS2同様に底面でSB16・17の柱穴を検出した。

調査区外へと続くため正確な規模は不明であるが、検出した範囲では幅11.7m、深さは最大で32cmを測る。底面でピットを検出したが本遺構に伴うものかは確認できなかった。

埋土は6層に分けられ、ほとんどが暗褐色から黒褐色土であるが、最下層に一部黄褐色土がみられた。地山粒や炭化物を含む層が多く、下層では御来屋礫層由来とみられる小礫を含む。堆積状況から東側からの自然堆積と考えられる。

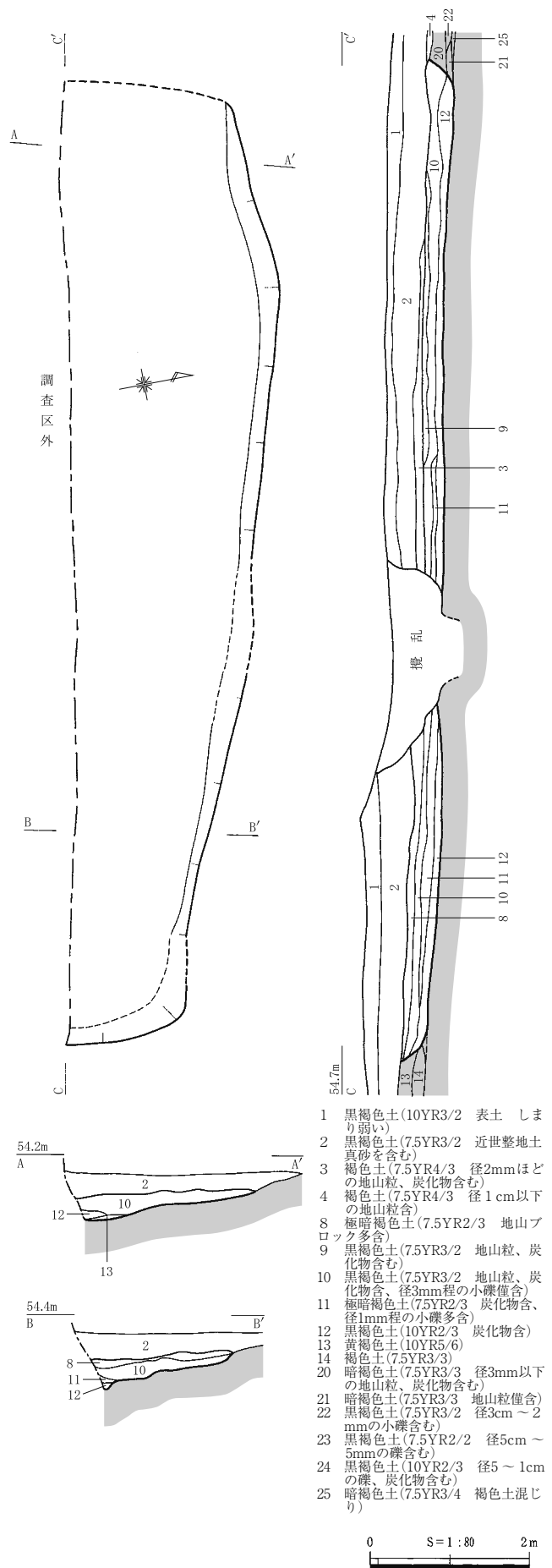
遺物は上・中層に多く、床面直上からの出土は見られなかった。須恵器坏身73・76・77、高台付皿74、高台坏75、土師器78・79、鍛冶滓F17を図化した。青磁80は混入品である。

本遺構の時期は出土遺物から8世紀後半に位置づけられる。

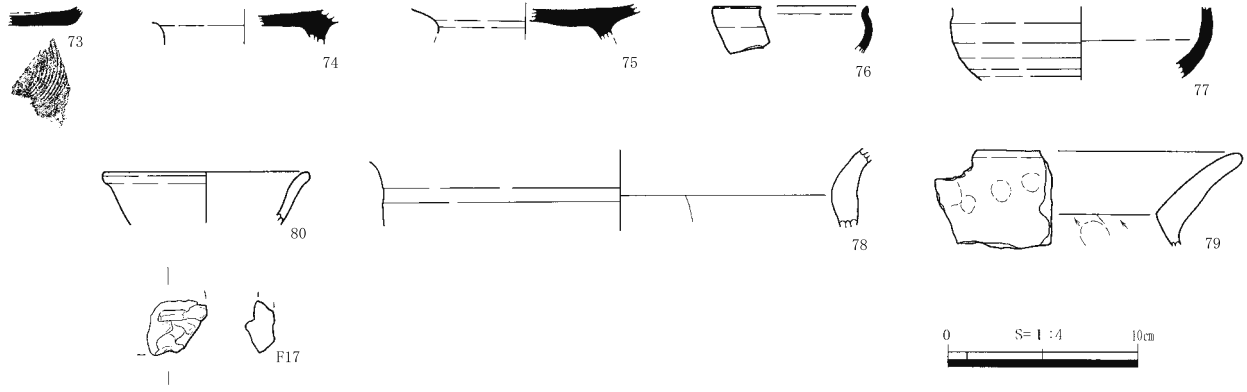
4 土壌墓

SK73(第77・78図、PL.16・39)

1区南側のY7グリッド、標高53.6m付近



第75図 SS3



第76図 SS3出土遺物

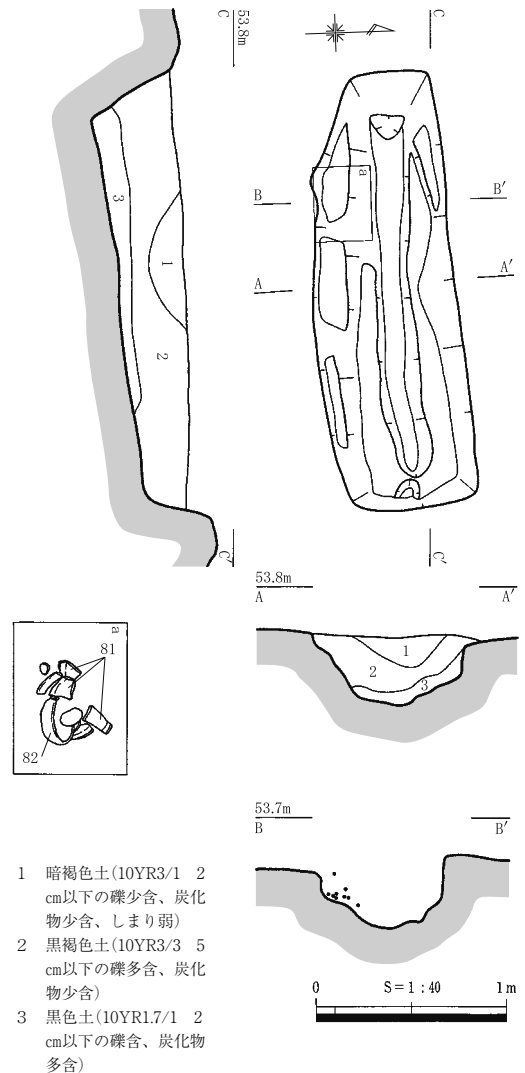
に位置する。

平面形は、長楕円形を呈し、長軸2.3m、短軸0.8m、深さは最大36cmを測る。主軸はほぼ東西方向となる。検出面はハードロームだが、掘り込みは下層の御来屋礫層まで及んでいた。遺構は二段掘りで、底面には幅最大21cm、深さ1～6cmほどの溝が掘られている。

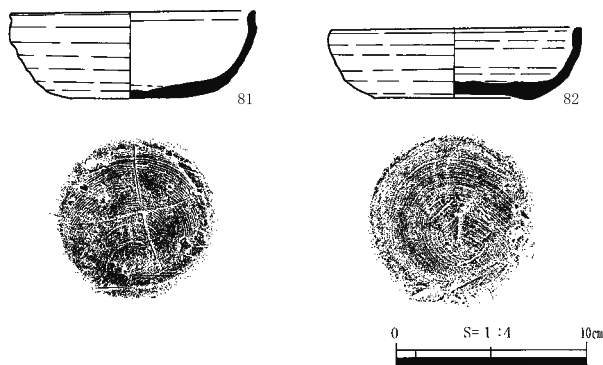
埋土は3層に分層でき、暗褐色から黒色土である。いずれも炭化物を含むが、遺構最下層の黒色土(3層)には特に多く含まれている。

遺物は遺構南西の上段で須恵器坏身2点(81・82)が出土した。これらは3層直上に2個体が重なるように置かれており、供献土器と考えられる。うち81の内面には墨の付着が見られたことから墨入れとして利用されていた可能性がある。

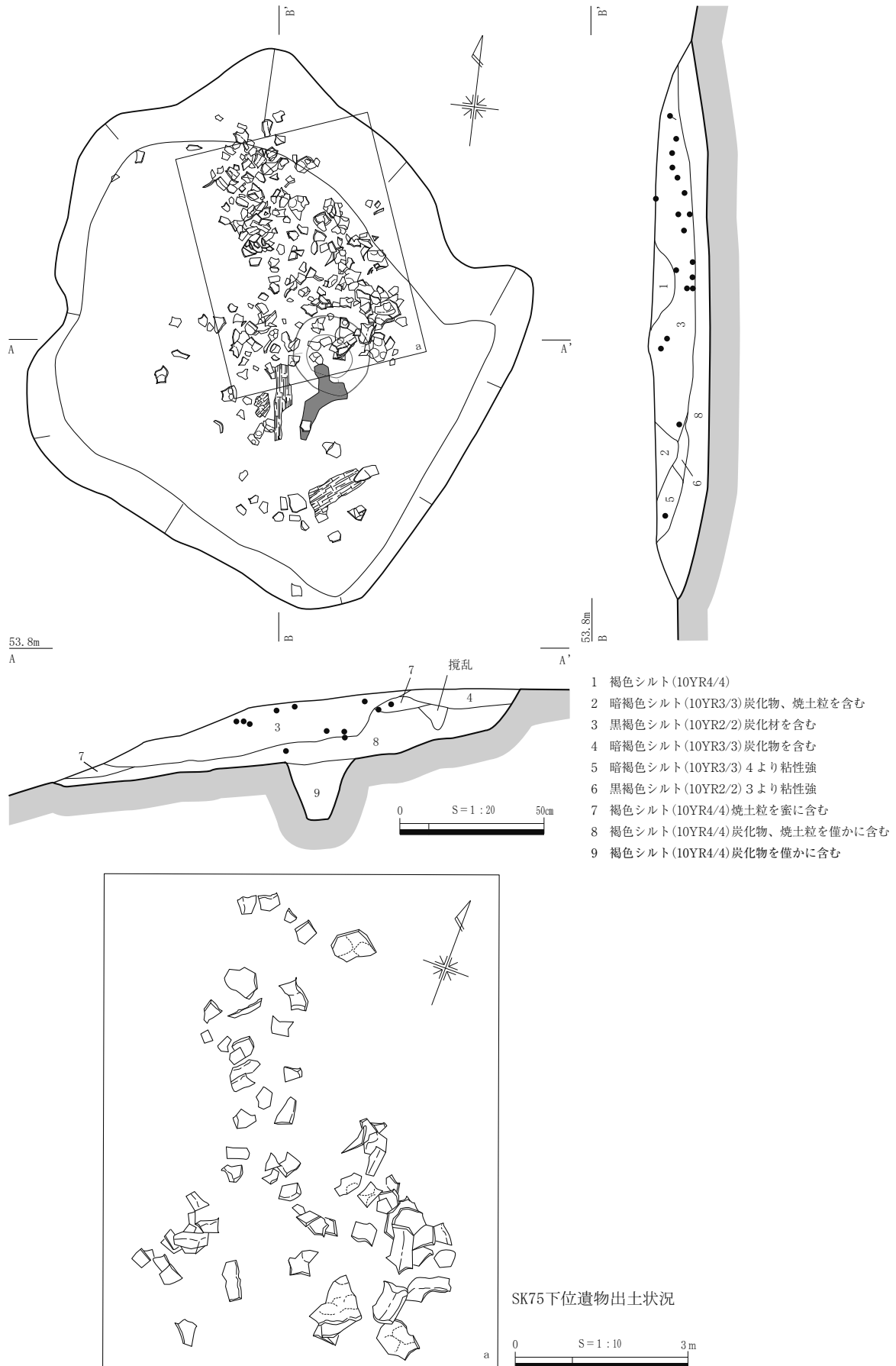
出土遺物から、8世紀後半ごろのものと考えられ、遺構の形状及び埋土の状況から伸展葬の土壙墓であると考えられる。



第78図 SK73



第77図 SK73出土遺物



第79図 SK75

5 廃棄土坑

SK75(第79・80図、PL.17・43)

1区中央やや東寄りのY4グリッドにあり、標高約53.2～53.6mの緩斜面に位置する。

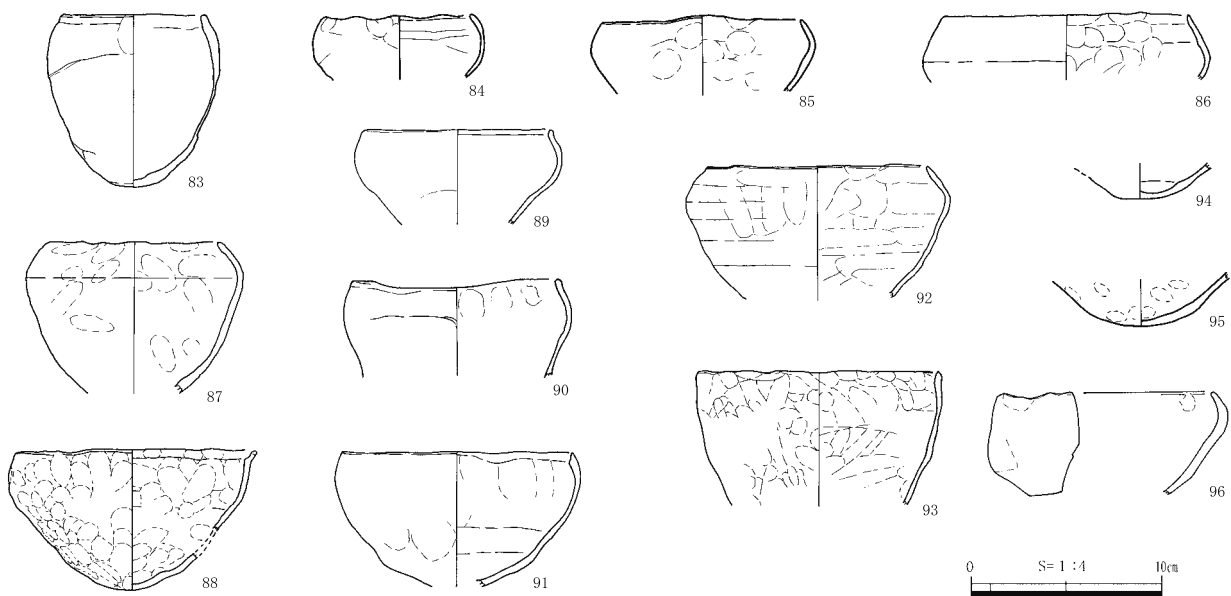
平面形は長軸1.87m、短軸1.75mの不整形を呈する。深さは21cmで、断面形は皿状である。底面の中央やや東寄りに径28cm、深さ21cmのピットを検出した。

埋土は8層に細分され、炭化物や焼土粒を含んでいる。遺物は3層を中心とする上層から焼塩土器が多量に出土している。

焼塩土器はすべて細片となっており、出土した個体数を明確にし得ないが、少なくとも20個体以上はありと推測される。ここでは14点を図化した。いずれも口縁部が内傾する浅い椀形を呈し、器壁は2～4mm前後と薄い。内外面には指頭圧痕が顕著に施され、底部付近は被熱による表面の剥離や赤変がみられる。88は全体の形状が復元できる資料で、口径が12.6cm、器高7.5cmで、容量は約350ccと推定される。

本遺構の時期は、出土した炭化材によるAMS年代測定で、 1325 ± 21 yrBP(7世紀中葉から8世紀前半)、もしくは 1289 ± 21 yrBP(7世紀中葉から8世紀後半)という結果が得られている(第4章参照)。周辺に存在するSS2やSB16などからも本遺構と同様の製塩土器が散見されるとともに、7世紀末から8世紀の土器が共伴しており、年代測定とも矛盾しないと考える。

土坑の底面や壁面に被熱した痕跡はみられず、土坑自体が炉とも考えにくいことから、焼塩土器は、土坑内に一括廃棄されたものと考えられる。



第80図 SK75出土遺物

6 不明土坑

SK15(第81・82図、PL.41)

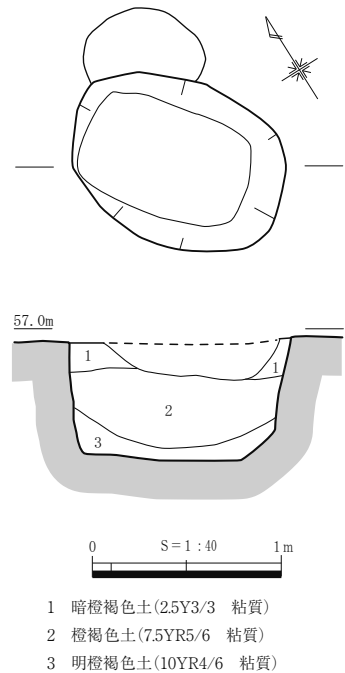
3区V6グリッドにあり、標高56.9m付近の平坦面に立地する。SB1と重複関係にあり、調査時では詳細な先後関係を把握することができなかったが、出土遺物からSB1に後出すると考えられる。

平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.6mを測る。断面形は、長方形に近く、ほぼ垂直に掘り込まれている。

埋土は、暗橙褐色土・橙褐色土・明橙褐色土の3層からなる。いずれも粘質の埋土である。

土坑底面から、完形の土師器坏身97・98が出土した。底面は、いずれも静止糸切りの痕跡が残る。器形と胎土の特徴から、須恵器模倣土師器の可能性はある。

土師器坏は、八峠編年平安Ⅱ期、9世紀末から10世紀に相当するものとする。遺構の性格は不明である。



第81図 SK15

SK20(第83・84図)

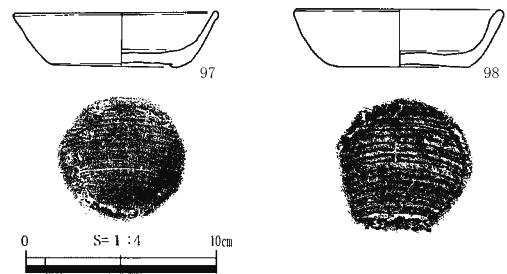
3区V7グリッドにあり、標高56.9m付近の平坦面に立地する。SB4・5の東側に近接する。

平面形は不整形円形を呈し、長軸1.2m、短軸1.0m、深さ0.35mを測る。断面形は、南側がやや緩やかになる逆台形状を呈す。

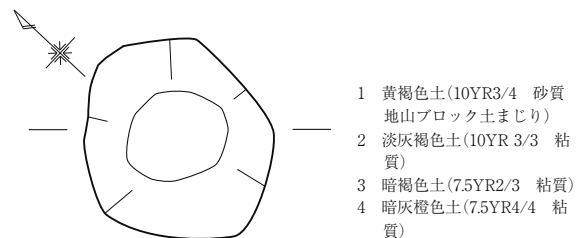
埋土は、黄褐色土・淡灰褐色土・暗褐色土・暗灰橙土の4層からなる。第1層が後世に入り込んだものと考えられ、砂質であるが、その他は粘質土である。

埋土中から、土師器甕99が出土している。

出土遺物から、奈良時代から平安時代の遺構と考えられる。遺構の性格は不明である。



第82図 SK15出土遺物



第83図 SK20

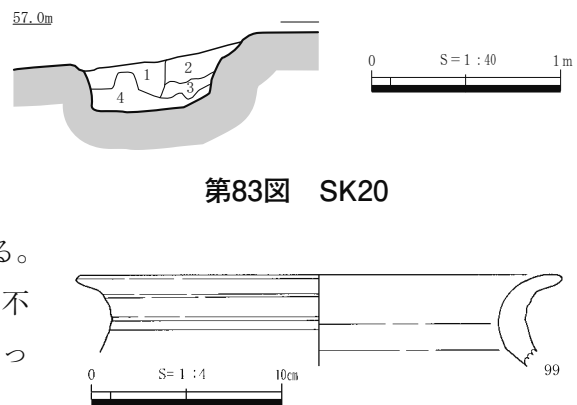
SK21(第85・86図、PL.16・38)

3区南西側のV7グリッドにあり、標高57.1m付近の平坦面に立地する。

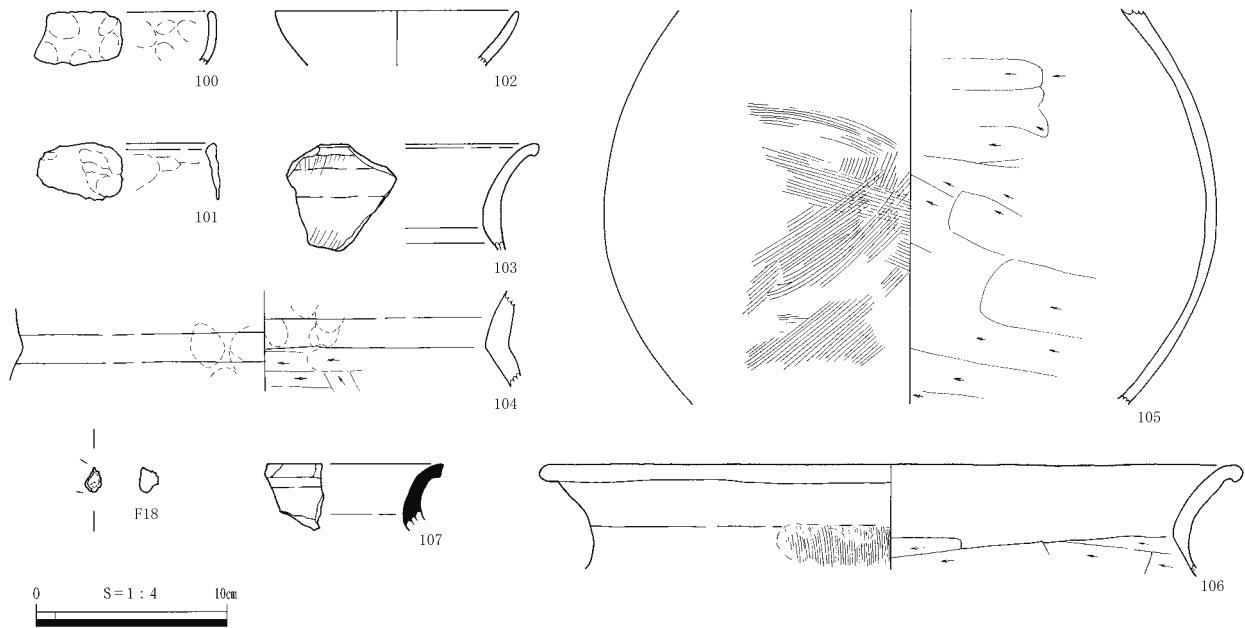
上部は圃場整備による削平を受け、底部のみを検出することができた。平面形は楕円形を呈し、現状で長軸0.7m、短軸0.5m、深さはわずかに3cmを測る。

埋土がほとんど残っておらず、本来の遺構の深さは不明である。調査時の所見からは、暗褐色土系の埋土であった。

遺構の埋土中及び底面から、つぶれたような状態で、



第84図 SK20 出土遺物



第85図 SK21出土遺物

焼塩土器2点(100・101)、土師器坏1点(102)、土師器甕4点(103～106)、須恵器小壺口縁部1点(107)、鍛冶滓F18が出土した。

出土遺物から、8世紀代の遺構と考えられるが、遺構の性格は不明である。

SK46(第87・88図、PL.16・39・41・42)

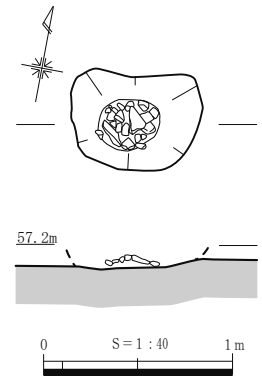
1区南東側のW7グリッド、標高54.1m付近に位置する。SS2埋没後に、埋土を掘り込んで構築されている。遺構は南側調査区外へ延びるため、検出できたのは半分ほどである。

検出した範囲では、平面形は半楕円形を呈し、長軸1.47m、短軸0.42m以上、深さ36cmを測る。

埋土は、暗褐色から黒褐色土で、地山粒、炭化物を含んでいる。

遺物は、埋土中から比較的まとまって出土しているが、特に埋土下層から大型の破片が出土している。土師器甕108～110、須恵器坏蓋111、高台坏112、高坏113、土製支脚114を図化した。

出土遺物から、当遺構は8世紀前半に位置づけられる。遺構の性格は不明である。

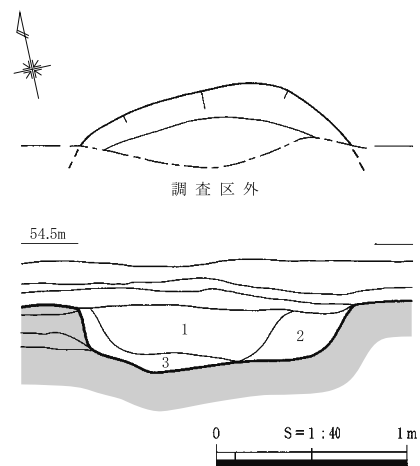


第86図 SK21

7 ピット群

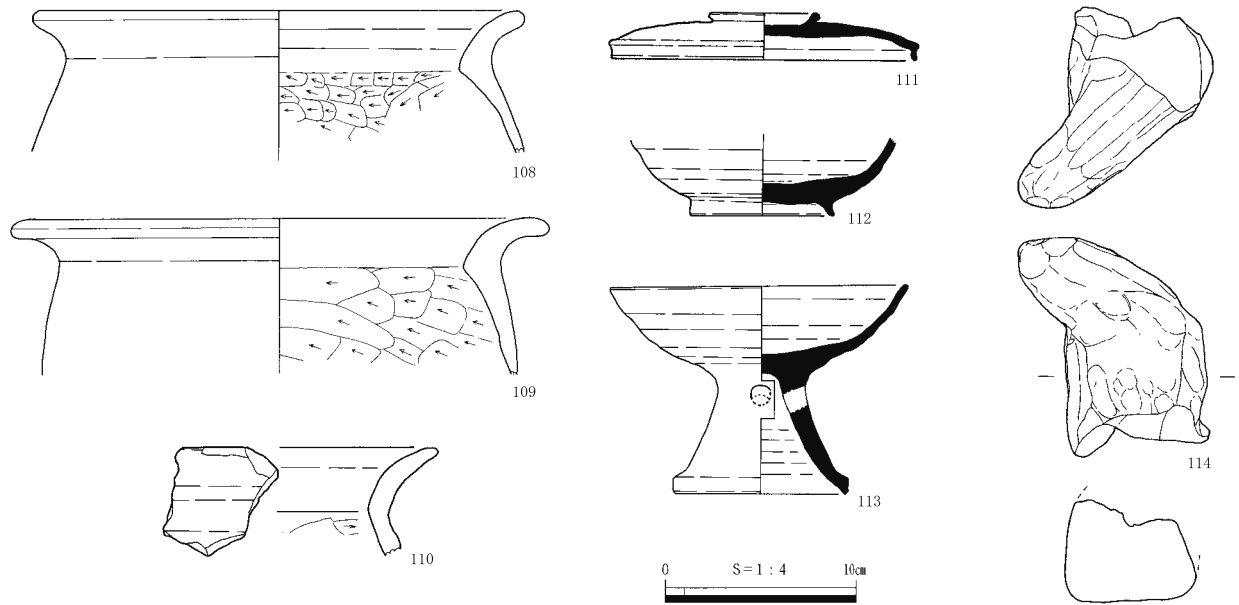
ピット群9(第89・90図、表16、PL.15・37)

1区南側のW・X7グリッドにまたがり、標高53.9～54.1mの平坦面に位置する。ピットの多くはSS2・3の底



- 1 黒褐色土(10YR3/2 径2mmほどの地山粒僅含)
- 2 暗褐色土(7.5YR3/3 地山粒、黒色土含む)
- 3 黒褐色土(10YR2/3 炭化物僅含)

第87図 SK46



第88図 SK46出土遺物

面で検出したが、建物となるようなピットの配列は確認できなかった。また付近にはSB16・17が存在するが、これらの遺構に関連するピットの配列はなく、これらの遺構に伴うものではないと考える。

計 13 基のピットで構成されている。

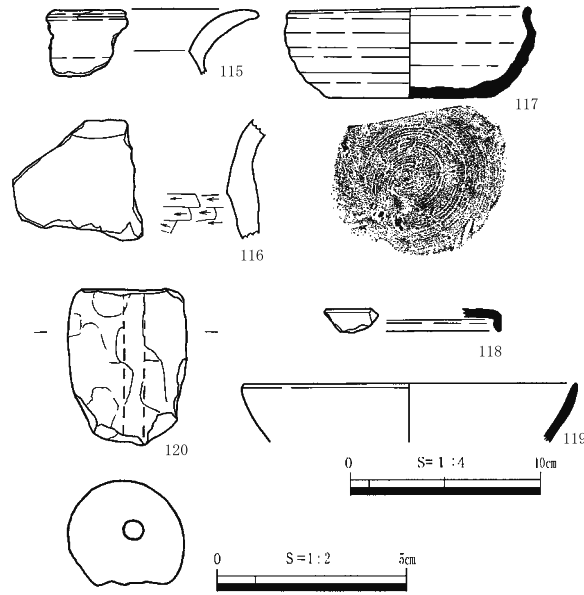
ピット埋土は、褐色から黒色土で、地山粒を含むものが多い。P5・9～13では柱痕跡を確認しており、柱径は10～20cmの間に収まる。

遺物はP5・9・11～13から出土している。そのうちP11出土の土師器甕115、土錘120、P13出土の土師器甕116、須恵器坏身117・119、坏蓋118を図化した。

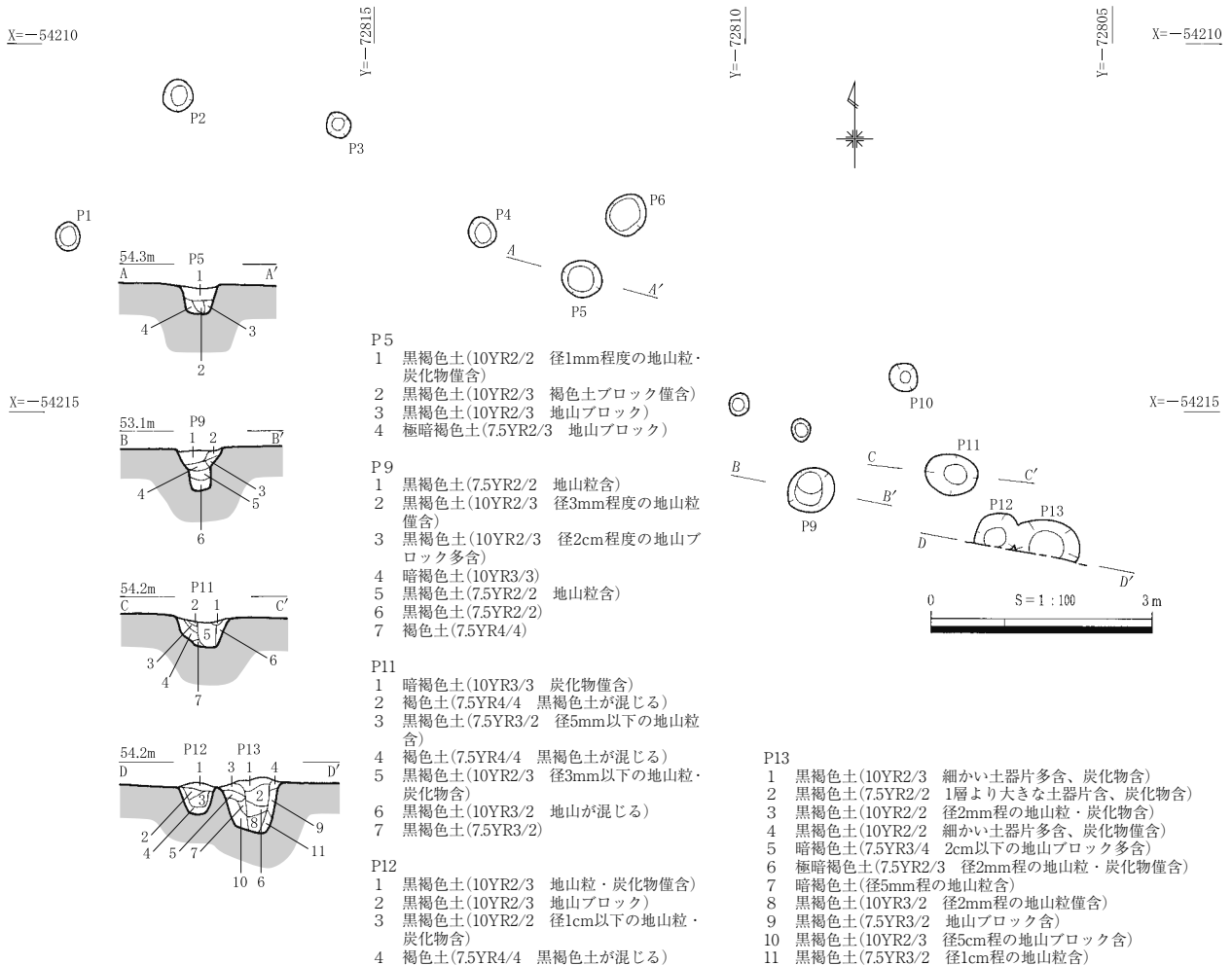
出土遺物から8世紀に属するものと考えられる。柱痕が認められるものもあるが、すべてが柱穴であるのかは不明である。

表16 ピット群9ピット一覧表

ピット番号	規模 (長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	40 × 32 - 16	
P2	43 × 40 - 32	
P3	34 × 34 - 42	
P4	42 × 38 - 20	
P5	56 × 51 - 37	土師器片、柱痕径 12cm
P6	55 × 55 - 26	
P7	30 × 26 - 21	
P8	30 × 27 - 14	
P9	65 × 60 - 60	土師器片、柱痕径 14cm
P10	40 × 40 - 58	柱痕径 10cm
P11	71 × 55 - 40	土師器片、柱痕径 19cm
P12	65 × 57 - 42	土師器片、柱痕径 18cm
P13	94 × 52 - 74	土師器片・須恵器、柱痕径 13cm



第89図 ピット群9 出土遺物



第90図 ピット群9